

高鷲町にある伝説

昔から高鷲には、信仰、民俗、感情などに基づいて様々な民話・伝承がある。それは、歴史的史実に関連したものもあれば、事実とほとんど縁遠いものもあって実におもしろい。

ここに載せた伝説は、昭和35年10月1日に発行された『高鷲村史』及び上村彰隆氏著書の平成11年10月20日発行された上村彰隆氏の『辛夷の記』に記載されているものの一部を再掲したものである。子供達が忘れていた高鷲の民話・伝承を会員の人達に伝えて、将来の高鷲・郡上を背負う子供達に伝えることを目的とする。

猪の洞の山うば

郡上一の高峯は高鷲村の大日ヶ岳である。この山の頂から東南のほうへ流れ出る谷川に猪の洞谷というのがある。谷の中流一の滝の付近に昔、山姥(うば)が住んでいたという岩窟がある。

この谷の入口に穴洞という在所があって、ここに与四郎という家があった。祖先は下総国猿島郡井上郷の平良忠というもので、良忠は平将門の乱を逃れてはるばる郡上の山奥へ来てここに居を定め、農業をしていたものである。

ある年の冬、寒い日の夕方のことであった。この家へ年の頃50余りのみすばらしい女が来て食を求めた。夜になっても行こうともせず遂に泊まってしまった。翌日もその翌日も吹雪のするままに、家人も別にとがめもせずしているうち、そのまま滞在することになった。

この女は、身には藤の皮のタコ織りで作った着物を着ていて髪形の形などもよほど異なった風をしていた。体がたいそう大きくて力が強かった。冬のことで別に仕事もないから粉挽きや、苧績(おう)みをさせた。

この家に自慢の大きな石臼があった。普通的女達では上臼だけでも持ちかねるほどのものだが、この女は二つ重ねたまま軽々と持ち運んだ。苧績みはあまり得手ではなかったものか二日ぐうんでも三日績んでも一向苧環(おだまき)が大きくなる。しかも、とても大食いだったので家人もあきれて食事の時は杓子(しゃくし)で飯をお椀(わん)に水平に塗りつけて実は中に少し空虚(くうきょ)のあるような付け方して与えたものだ。



その内いつか寒さも薄らいできたので、ある日、出立の支度をして、出がけに笹の葉包みの薬物と「ひんぬりごきにご馳走さま」という一語を残して立ち去った。ひんぬりごきとは飯の付け方に一矢(いっし)を報いたものであろう。家人は不思議な女だと思っていたので、その行き先を見届けようと後をつけたが、戸外へ出ると大層足が速くて見失ってしまった。

後で村の一人が猪の洞谷の道でその日見馴れぬ女に出会ったということによって、多分この女は、猪の洞山の山うばであったろうという事になった。

その績んだ苧環は見かけは小さかったが、後に与四郎の妻が紡ぎてみると、いくら繰(く)っても繰っても繰りきれない。その内に居竦(あずみ)にいた赤ん坊が泣き出した。妻はもう少しだから終わってからと思いい乳を与えないで紡いでいるうち、赤ん坊はどう

とう泣き死んでしまった。そこで大騒ぎをして、試しに山うばの呉れた薬物をのませると不思議に赤ん坊は蘇生（そせい）した。
それからずっと後。同じ村の鷺見伝右衛門という家へも山うばが寄食したことあるという事である。

名刀千束丸（「鷺見大鑑」の関連する記事が記載されている）

高鷺村向鷺見に城山といって鷺見氏代々の城跡（写真）がある。鷺見氏第12代鷺見長門守朝保といった。ある年朝保は、大番の役が当たったので京都に上がることになった。大番の役というのはその頃の武士が六ヶ月間京都の御所に守衛をする大切な役目である。

上京の途中桑名から供人をば家老に連れさせ、自分は家来一人を連れて伊勢大神宮に参拝し、道を長谷越の間道にとって、大和の国の三輪の久保という所へ出た。この山道を通っていると路傍の大木の下に一人の青年が昼寝をしていた。すると後ろの林の中から一匹のうわばみが出てきてこれを呑み込もうとしたが、不思議にも青年の腰に差していた刀がひとりで抜け出てこれを防いだ。うわばみは驚いて一旦退いたがまた再び襲った。しかし、刀が自分から抜け出て防ぐことは元の通りである。

物陰から見ていた朝保は青年のそばに行き、これを揺り起こし、この刀を所望（しよもう）したが、青年の言うには「この刀は町の鍛冶屋に朝夕たゆまず三年の間薪千束を贈って漸く作って貰ったものだから、幾らでも売ることには出来ない」という。朝保は、自分の指料（さしりょう）岩切丸という名刀と取り替えて貰った。この刀のつかやさは藤蔓（ふじづる）の千段巻きのお粗末なものであったから在京中同僚の武士達はこれをあざわらわぬものは無かったが、刀身は青年の真心が籠もったものか、非常に立派なものであった。この刀は薪千束に代えたものであるから千束丸といった。



鷺見城址

巢郷の池田

千束丸はその後朝保の子兵庫守永保に伝えられた。永保は1日小姓一人を連れ城東の巢郷野あたりを散歩し巢郷ヶ池のあたりに出た。

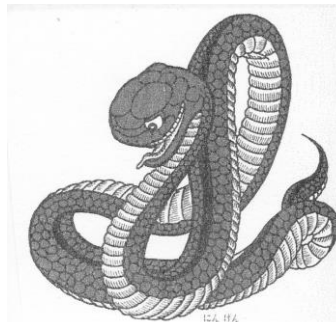
うららかな日射しを受けて池辺の若葉は美しい影を水面に写していた。永保は、芝生

に休んでいるうちにうつらうつらと眠ってしまった。

やがて池水の方に波が漂うと、見る間に一匹のうわばみが首をもたげて永保に襲いかかるとしたが、腰なる千束丸が自ら抜け出てたちまちこれを防いだ。

今まで何気なく草花を摘んでいた小姓は、驚いて早速永保を

呼び覚まし、わけを告げると、永保は千束丸の霊能もさることながら城下近くに不埒千万（ふらちせんぼん）であるとして、早速領内へ「此の大蛇を退治したものには池と其の付近の土地を与える」というお触れを出した。しかし誰もこれに応ずるものはいなかった。



うわばみ

巢郷の庄左

その頃向鷲見に庄左というものが住んでいた。一日巢郷ヶ池に行つてその地形を見るに、池の一方に堀割を造つて池の水を落とせば、池を干すことが出来るという見通しがつた。そこで早速おふれのままに池を干すことになった。

終日溝を掘つて、翌日に行つてみると溝は元のごとく埋められて、水は満々と湛え（たたえ）ている。また一日掘つて翌日行つてみるとまた元の如くであった。これには庄左もトント困つたが、かねて大蛇は黒がねを忌むということを聞いていたことを思い出し、今度は馬鍬（まくわ）の子を抜き取つて持つて行き、夕方帰宅の時は一日掘つた溝の掘り口の処へこれを立て並べて置いた。

翌日行つてみると、今度は堀割は元のままで水位はずっと下がっていた。庄左はこれに力づき毎日掘り下げては馬鍬の子を立て、だんだん溝を掘り下げていった。

池水は1日ごとに減じていった。さすがの大蛇も居堪えられず、1日池の当たりが大層鳴動（めいどう）し、黒雲が空をおおうと見るまに大蛇は真っ白な雞（とり）になって遙か西方、前谷村の村間ヶ池をさして飛び去つた。

庄左は遂に池を干して大蛇退治に成功し、池の跡は田をこしらえて耕作した。これが今の巢郷の池田である。

池田の付近はその後、山ぬけで地形が変わり、池田は更に四郎兵衛という者が修理したが、昔よりずっと小さくなったという。



大蛇のぬけ穴

その年の秋、大雨が降つて、近年まれな大水が出た。そのとき池田の対岸の切立巢郷の地で、大きな山抜けがあった。そのぬけあとに南へ指して深い横穴が口を開（あ）けた。人々はだいじゃのぬけあなとして評判した。

荒っぽい気性の庄左は、このことを聞いてそこへ、はいつて行くことになった。案内をした人達は心配しながら外で待っていたが、なかなか出てこない。小半時（今の1時間）もたつて庄左は土まみれになって出てきた。「コンコンと音がしたが何れ切立の庄平のカラウスの音であろうと思った。まだ穴は続いていた」といった。

現在その穴は埋まってしまったが、じゃぬけと云つて大きなぬけ跡は残っている。

庄左の後妻

この年の暮に庄左の妻は病気にかかり、14歳のおせんという一人娘を残して死んでいった。さすが豪気な庄左もすっかり力をおとし、翌年の春は田畑の仕事も放(ほう)つてしまって、おせんを連れて一里余も離れた、桑ヶ洞の籠(こも)り小屋へ引っ越して薙(なぎ)煙かせぎを始めた。桑ヶ洞で二冬(ふたふゆ)過ごして、3年目の春、山からおりて来た庄左は娘に赤んぼを負わせていたという。

その年の夏のある日の夕方、「夕めしを食べさせてほしい」と中年の女が入ってきた。そのあだっぽい姿態(したい)は近隣の百姓女でないことは一見して分かった。翌朝になって頼みもしないのに部屋の掃き掃除をしたりなどして、心やすそうに滞在してしまった。その女が来て以来、庄左は娘のおせんに何かと辛(つら)く当たるので、おせんは赤んぼを負ぶったまま家出してしまった。

庄左は後妻がほしいと思っていた矢先であり、「ごみ溜(だ)めへ鶴が舞おりたとは此のことじゃわい」と、この若い後妻にうつつをぬかしていた。ところがこの女に一つ解(げ)せぬことがあった。それは決して乳のあたりにさわらせないことである。庄左はふしぎに思っていたので、一夜女が寝入るのをうかがって、そっとふとこころに手を入れてみぞおちのあたりをさぐってみた。それは何と、一面につめたいうろこであった。さすがの庄左身の毛が弥立(よだ)ち、思わず枕(まくら)もとの山刀のつかに手をかけ、力まかせに女の胸元を刺(さ)した。女は跳(は)ね起きて逃げ出したので庄左はこれを追って内庭に追いつめたが、たちまち見失ってしまった。たしかにまだ外へは出てないがと、かどぐちを見ると大戸が2、3寸すいていた。

その晩はさすが、がむしゃらな庄左もおちおち眠れず、早朝に起き出て前の川に顔を洗いに行くと、いつも対岸の田のぼたに横たわっている長石が大蛇の顔になって、目をいからして庄左をにらんでいる。それ以来、庄左は床(とこ)について幾日もたたないうちに死んでしまった。

庄左の屋敷は、今の浄勝寺の門前から切立に通ずる旧道の川ぶちにあったが、今は田になっている。大蛇になった石は、その対岸のきがみを煮るかま場のぼたに今も横たわっている。心して見るとヘビの頭に似ている。

巢郷の池田の近くにも庄左屋敷というのがあがるが、これは鷲見城跡柳の馬場の一角で庄左が池の干拓をした時の小屋跡である。

それにつけても知りたいのは名刀千束丸の行方(ゆくえ)である。



鷲見氏の鷲狩り伝説

小川休和著『濃北一覽』より

鷲見殿御出生を尋ねたまわるに、大宮殿二男登記丸様と申す。承久3年7月朔日御出生なされ、その後御名を武藏権守と申す。時に天皇第二皇子御誕生します。折柄正月2日の御夢に、これより東北に鷲の巢ごもりあるをみたまい「これ正夢なり、さがし見るべし」と勅命あり。武藏権守は供人34人を召しつれ東北をさして尋ねけるに。美濃国長良川に差しかかるとき、鷲の羽根流れ来れり。取り上げてみると4尺8寸もあり。これ鷲の大石打ちという羽根なり、白羽に紺地にて八幡といえる文字あり。不審に思いこれより山奥に鷲の巢あるべきこと必定なり。神霊なるべしその羽根押し戴き郡上をさして下りける。しかるに東乙原ちいう所に来て休みけるに、遙か向こうの虚空に大鳥舞い居るを見て「鷲ならんか」といえば「鷲に非ず鷗(かもめ)なり」といへり。東乙原に鷗見ヶ洞といえる所あり。

権守進んで山奥深く入りけるに、その頃郡上八幡は野原なりける故、小野村に止宿してそれより上の保、明方と手勢を二手に分ちける。持ち来れる鷲の大石打羽根は、八幡の神霊なればこの処に残し置き「鎮守となすべし」とその処の岩の穴に差置かれける。小野村の百姓挙って「氏神となすべし」とて山の峯に勧請して堂を立て祀りける。これ小野村八幡宮のご神体にてその頃より奇瑞多しという。

さて武藏権守は上の保村へ尋ね行き徳永村より此処、彼処の村々に8日逗留せしに八日町、2日逗留せしに二日町と名づく。

追々分け入りて遂に飛州境なる岩高村小左エ門といえるものの家に止宿し、その近辺のここかしこを捜し霞ヶ洞といえる所に来りけるに、この処に山口才三郎といえるもの柴の庵を結びいたりければ、それに頼り鷺の巢尋ね来たりし事の委細を語るに、才三郎申しけるは「此の山の絶頂は雲ヶ岳といえる高山なり。若しやそれにあらんか」といえる故、この処に足をとめ、さがし見んと霞ヶ洞に小城、大城と名づけし陣所を構え、7日余り日々才三郎案内しけるに、鷺の巢見えず。岩高村小左エ門見舞いに来たり「永々に相成り如何や」と伺い参られり。「一先ず私方へ御戻り後休息然るべし」と申しければ、権守も才三郎に篤と頼み置き小左エ門方に同道致しける。然るに才三郎諸方を見廻る中、ある日昼四ツ頃と思うに、大清水といえる所へ、鷺の大鳥水呑に来たるを見附け行き先を見るに、雲ヶ岳の絶頂へ飛び行く。

それより毎日大清水へ心を配り居りけるに、いつもの如く鷺の水呑に来ること両三度に及ぶ。先なる雲ヶ岳の頂は鷺の巢と見えければ、急ぎ小左エ門方へまかりこし、武藏権守へその由申しければ、勇み進みて馳せ上る。この処を小二声という。また四五町も上るに鷺の羽根落ちてあれば拾い取りて進みける。この処を羽落ちという。それより暫く休息して烏帽子(えぼし)を脱ぎ木の枝にかけ給い、この処を烏帽子掛という。

銘々に物の具を携え権守は大弓を取り手勢打揃い雲ヶ岳へと志す。深山なれば藪を切り払い分け上る。遙かに見れば鷺の巢大木の中にあり。間近く分け登るに、鷺は人の来るのを伺いけるにや傍らの枝に大鳥とまるを、武藏権守は大弓に矢をつがえ、きりきりと引きしぼり丁と放てば誤りまたず矢先にかかり乍ら鷺は人をめがけて飛びきたり、掴みかかるとせし所を大刀を引き抜きて刺し通す。妻鳥を討ち取りければ雄鳥も続きて飛びけるを才三郎かねて先祖より伝わりし秘蔵の大刀にて抜く手も見せず打ち、遂に二羽とも討ち取り、それより鷺の巢を手勢の者共におろさせて鷺の子を生け捕りければ一同喜び限りなし。岩高村小左エ門もその由ききて伺い参り共に喜び同道しける。

それより岩高村を向鷺見村と申し、才三郎の在所を鷺見と名づけ、現在の八ヶ村を鷺見郷といえり。

かくて武藏権守は小鷺二羽を籠に入れ飛ぶが如くに道を急ぎて都に上り、ありし次第を奏上し、鷺を献じければ御満足斜めならず御歓悦あつて、武藏権守は家名を鷺見と賜り、建長3年3月12日(一書に5月12日)美濃国芥見庄鷺見(すみ)八ヶ村を永代知行1623石下されたり。

その後、武藏権守は向鷺見に一城を築き、普請奉行は稲葉大膳勤められ同5年8月3日御代出来仕り、さて才三郎にはこの度格別働きによる事なり、その上往古より地付きの者なれば大屋というべく同姓を免されて鷺見大屋九兵衛と改め御紋も丸に剣菱、印判も大屋といたし相用い候様被仰出格別の御答応ありける。



いっぶく平から見た 雲ヶ岳 (現鷺ヶ岳)



いっぶく平での鷺見頼保公顕彰会

さらけが池

江戸時代の中頃、鷺見村の奥の谷間に、弥六という木地屋が住んでいた。木地屋とい

うのはトチや紅葉の木を原料として盆や椀を作るのを業とする山の生活者である。弥六の家に今年16歳の美しい娘があった。その頃毎年春先になると、この地方へ鉋や鎌などを商いに回って来る越前の更気(さらけ)清右衛門という鎌屋があった。

清右衛門は今年も商いに回って来て、鷲見の在所をすまし、木地屋の家へもやって来た。今日は仕事場の音もせず、うららかな日射しにコブシの花も咲きそめて小鳥は春のささやきを交わし、山に一軒家はとてもものどかである。木地屋夫婦は谷の奥へモミジの老木を伐りに行っておとめ一人が留守居をしているのであった。清右衛門は分別盛(ふんべつざかり)の男であったが、年若いおとめと、つい親しくなってしまう。長くとどまることも出来ない。「また来年コブシの花の咲く頃必ず回って来るから」と堅く約しておとめと別れた。

おとめは人里はなれた、寂しい一軒家で、なつかしい清右衛門に会える日を指折りかぞえて待っていた。長い雪国の冬も過ぎて、いつしか待ちに待った背戸山(せとやま)のコブシの花が咲いたが、清右衛門の姿は見えない。おとめは矢もたてもたまらず在所へ下りて心当たりを聞いてみると「鎌屋は、さっき西洞へ行くといつて上野へ上られたぞや」、おとめはすぐ後を追ったが、上野は道が幾筋か分かれていて、ついふみまよい行っても行っても清右衛門に会うことが出来ず、日は暮れかかるし袖(そで)を引くものは上野のヤドメばかりである。おとめは悲しくなり「やっぱり男の心が変わり、私を見捨てるつもりであったか」と、せつない乙女の小さい胸は、あわれにも悲嘆のあまり、野なかの池に身を投げたのであった。

翌朝弥六夫妻は上野へ上っておとめをさがしたが見つからず、ふと野中の大きな池のほとりにめぐり出た。夜明けの水面をすかし見ると一つの小さな盆が浮かんでいる。弥六がとり上げて見ると、自分が作ったもので、日頃娘が暇さえあれば一生懸命磨いていたモミジの小盆であった。弥六の妻はかつて娘が「清右衛門さんが来たら、この盆でお茶を出すよ」といったことが思い当たって、二人は涙ながらにおとめの亡骸(なきがら)を人目にしれぬように密かに自分の家へ運んだ。娘の非業の死を隠そうとする親心である。

木地屋は宗旨が禅宗であったから、はるばる八幡町慈恩寺の和尚を迎えて葬式をすまし、和尚の染筆でおとめの墓を建てた。自分等は奥山住まいだけれどもかわいい娘の墓だけは人里近いところに建てたいと、今もおとめの墓は村はずれの路傍に残っている。

碑面に「文化13戌(いぬ)年」としてされている。これは今から凡そ150年前に当たる。モミジの小盆は慈恩寺に寄進された。更気清右衛門は翌年回って来てこのことを聞き、おとめの墓に参って後、上野へ上りおとめの後を追って自分も池へ身を投げて死んでしまった。



国境のとりきめ

濃飛の国境については、地勢上境界を定めるに難しい地形である。鷲見村との境界点は広々としたすみが上野の高原地帯であり、西洞方面ではひるが野の地である。ひるが野は、分水界は野の南の端であるにもかかわらず大日ヶ岳から東に走る山脈は野の北を限っているから、一見して野の水は南に流れるかに思われるが、実は山脈を押し切って北に流れている。それで一千余年の昔、白山開登の時ここへ来られた泰澄大師も「見たがえた」といわれ、それが今のみたがや(見違)の地名の由来である。

この国境をはじめて定めたことについて、おもしろい伝説がある。古文書によると元禄7年にこの国境線を再確認した、という記録がある。この伝説は、それよりずっと前のものである。

「鷲見の郷から飛騨に通ずる道路は東西二筋ある。その一つは鷲見郷から飛騨の町屋村方面に通ずる間道で、今一つは板橋を経て野々俣村へ通ずるものである。この道も今とちがい、ようやく牛馬の通る程度のものであり、あたりは両国にまたがる一面の林であったに相違ない。かような地勢と状況であるから境界決定の困難を予想した濃飛双方の役人は一つの方案を考え出した。それは、あらかじめ日取りを決め、その日の朝、一番鶏(いちばんどり)の鳴くのを合図に双方同時に出発して行き会ったところを境界にしよ

うということであった。時計も測量器械もない当時としては確かに名案だった。
 いよいよ日取りが決まると、その前日には双方たがいに目付役の者を交換して庄屋の宅に泊まりこませている。そこで美濃方(めのがた)では古老の知恵によって鶏は夜明けに近づくと大気自然の暖かさを感じてときをつくるものだという考えにより、あらかじめ鶏のとまり木を、節(ふし)を抜いた竹で作っておいた。
 いよいよ出発の朝、ひそかまに、ぬるま湯をとまり木に注ぐと鶏は、普段より半時(今の1時間)も早く泣き出した。庄屋は「お役人様どうぞお出かけを」というと、役人は「まだ夜中であろうが」「いやああの通り、とりが鳴いております」確かにさわやかな一番鶏の鳴き声であった。こうして、両国の立会人一行が行き会ったところは美濃方に有利な地点であったことはいうまでもない。
 そこで双方2本づつ持ってきた標柱を立てて永く境界の地と定めたのであった。今もここを四本杭(しほんぐい)といっている。



四本杭のレプリカ(表面)



四本杭のレプリカ(裏面)

折立長者の白馬

天正13年11月29日西洞村折立長者の滅った当夜のことである。長者弥左衛門は夕食後、床についたが寝苦しくて眠られず起きて家の前へ出た。すると、はるか向こうを夜目にもハッキリと白馬が駆けているのが見える。確かに自分が愛用しているしろである。弥左衛門は不思議に思っているのと、しろは南から東へ、東から西へと長者の家の持ち内の田畑や草場などの外側に沿って駆けている。しろは更に西にまわり釜ヶ洞川を越え川西の山へ差しかかるあたりは、もうヒヅメは土についていない。駆けるのではなくて、ふわりふわりと夜霧の空を飛んでいた。ちょうど弥左衛門の持ち内の土地を一周した。「天馬空を行く」という言葉があるがまさにその通りであった。
 一回りするとしろははるか西方大日ヶ岳の頂上さして雲にかくれてしまった。弥左衛門は夢であったろうかと、家へ入って下男を起し、松燈(あかし)をかざして、厩(うまや)を見るとあお(くろうまのこと)だけがキョトンと厩にたたずんでいた。
 その晩の亥子(いね)の刻(真夜中)、白山火山が大爆発して長者の家や田畑はまたたくまに崩れつぶれてしまった。それはちょうどしろが一周した範囲の土地であったという。今も大日ヶ岳の頂上に近く南東に面したところに、毎年春、雪の消え残った形が白馬の形になるのは、長者弥左衛門のしろの形見であるといわれ、その残雪が荒れ馬の形になると、その年は風水の害があるといわれ伝えられている。

しろの友のあおは裏の川へ押し流され濁水にのまれ死んでしまった。今もその淵を馬の巻という。



大日ヶ岳山頂部分の白馬の形をした残雪

八百僧

むかし、むかし、そのむかし、八百僧にそれはそれはいかいな、見るからに小気持ち悪いような池があったそうじゃ。

その池のねきの山の洞穴に百濟（ひゃくさい）と言う坊さんが仏の道を修行しようと思つて、願（がん）を立て、ひっそり立て籠もってござったんじゃそうじゃ。

そのじぶんの八百僧と言や、その辺の山へ誰りも入るもんがいなかったもんじゃで、抱えきれんようなでっかい木が、びっしり立ってこんどつて、あーぬいても天づくが見えんようなあんばいで、川づたいにいくしかない、昼間は暗いような、夏でもぞくぞく寒気（さむけ）のするようなどころじゃったげな。

百濟はぜんまいやわらび、ふきのとうなど、季節の変わるたんびに首をやん出す、山菜を食っては命をつなぎ、冬は秋口に貯めといた木の実をかじって寒さをしのぎ、明けても暮れても、池を見つめて修行してごじゃったんじゃそうじゃ。

そのような修行を幾年も幾年も続けてござるうちに、着てござった衣は、おんぼろさんぼろ荒布（あらぬ）の行列のようになってしまい、風呂へは、ねっから入らっせんもんじゃでど汚（きた）らしゅうて、体はやせてしまい、髭はのびほうだいで、仙人のようになってまってござたそうじゃし、それでも目だけは人の心を射抜くように、いつでもぴかぴかと光っとたげな。

悲願が結ばれたんか、何を決意させたんか分からんけど、ある日、突然、百濟は洞穴の中で長いこと使ってござった所帯道具を、悉皆（しっかい）池の中へぶち込んで、捨ててしまい、どこへいかさせたか分からんけど、姿を消してまわせたんじゃそうじゃ。

それから後のことじゃが、「この池に大蛇が住んどる」と言つて、誰（だ）りも、はっきり正体を見たもんはないんじゃけれども、そういう噂が広がったじゃそうじゃ。ひょっとしたら、急に姿を隠（かく）いてまわせたあの百濟が、大蛇に化けて、引き続き修行をしてござるんじゃなからうかと誰も彼も信じ込むようになったんじゃ。

それから5・6年後の、ある年の梅雨の頃じゃが、ようもこうも長雨大雨が続くと思つたら、池の水があふれ出ている、土手の役目をしとった山が、ちいたつ崩れるうちに、急にドドーと一夜のうちに崩れてしまい、あんなにいかいな池が影も形ものうなつてしまつてショロショロと流れる小さな谷川に変わつてしまつたんじゃげな。大蛇もこん

なことじゃ住んどるわけにいかんもんじゃで、西の方の村境にある池へ移ったということじゃが。

その夜明け方、向鷺見村の宇佐衛門という人が、夜んべはひどう雨が降ってやけに川の音がしたが、田んぼはどやーなあんばいじゃしらんと思って、寝まき姿のままひのり場へ出て、まんだ雨は止みそうにもないが、雲行きはどうじゃしらんと、あーぬいて、天を見さっせたんじゃ。そしたら白い馬にぐるぐると巻き着いて鎌首を高く持ち上げ、黒いびんびろの衣をまとって、天ずくを西の方へ飛んでいきよる大蛇を見さっせたげな。宇佐衛門はびっくりこいて家の中に飛び込み、寝床へもぐり込んでまわっせたそうじゃ。家のもんにいや尻(けつ)の穴が小さいでおそががると思って、そのことを黙りこくってござったんじゃげな。

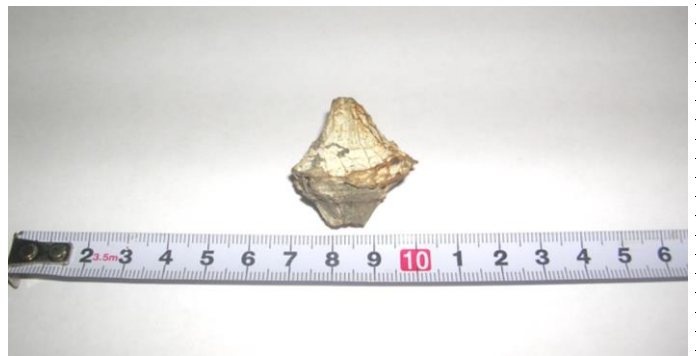
それから2・3時(とき)(5・6時間)経(た)った頃、宇佐衛門の戸の口に、一人見馴れぬ旅の坊さんが訪ね来て、宇佐衛門を呼び出し、「おみや、今朝この高(たか)を白い馬(うんま)に乗ったもんが飛んで行くのを見なんだか。」

と言って、さぐるような目付きで尋ねさったげな。宇佐衛門は、今朝方のこととあんびよう符合せるもんじゃで、小気味が悪うなって、

「おりゃ、しゃーなもんでんで見とらんぞ。」

と言って、その坊さんをあしらわっせたそうじゃ。それを聞いた坊さんは疑るような目付きで宇佐衛門をにらめつけといて、小走りに去って行ってしまったげな。もしも、その時「おりゃ、見たぞ。」と、ほんとうのことをいったら、どやーな目に会ったじやろうかと、身を震わせて言わっせたげな。

なお今でも、八百僧のせせらぎというところの岩盤に、様々な模様が付いている。これはその時、坊さんが池の中へ投げ込んだ家財道具の痕跡(あとかた)だという。また、この川からソロバン珠の形をした石がよく見つかる。これもソロバン珠が散って石になったものだと、いい伝えている。



ソロバン石

郡上谷

むかしむかしそのむかし、ある年の夏のことじゃが、6月の中頃からかんかんとした日照りが続いてのし、みんながいくら真剣に雨乞いをして、天にや雲一つ浮かんでこず、田んぼや畑に作ってある作りもんは、言うに及ばんことじゃが、野山の草木まで萎(しな)びてしまっ、今に枯れて死んでしまうんではないかしらんと思うほどのし、何もかもかさかさになってしまったんじゃげな。ほんのこの間まで、渦を巻きながら泡立って、どっどと流れよった川の水も、すっからかんに干(ほ)せ上がってしまっ、底が知れんと思っった川も、手に取るようによろ見えるようになたんじゃそうじゃ。そのようなあんばいじゃたもんでのし、長良川の真中へんや、ずうっと下の方の人の仰山住んでござる所では、水飢饉も通り越して、そりゃひどい大騒動じゃったということじゃがのし。

それでも、川上の方から、馬の小便ぐらいの水が、ちょろちょろと流れて来よるもんじゃで、

「どこから流れてくるんじやろうえ。」
「どこかに、湧き出ているところがあるに違いない。」
と、下の方の衆が、暑い暑いはくらのせるようなかんかん照りのなかを、ぞろぞろ手桶をひっさげて、干せた川伝いに上の方へ上の方へと、飲み水探しにのぼってごじゃったげな。
「まんだ上じや。まんだ奥じや。」
と言って、上ってきよるうちにのし、この村の本流と切立川の出合いの所までござったんじや。どうも本流より切立川の方が、余計にじめっとようなふうに見えたもんじやで、
「間違いのうこっちの方じや。」
と張りこんで上らせたげな。だんだん湿り気も多うなってくるし、あちこちに水溜まりも残つとるもんじやで、嬉しゅうなつてまつてのし、
「湧いとる所は、もう直(じき)じや。」
と、そこから1町程(約百m)上ったんじやげな。そしたら案の定、槍が淵と手斧(ちょうな)が淵にのし、そりゃ冷とうて手の切れるような清水が、こんこんと湧きながらたまつたじやそうじや。
「こりやありがたいこちゃ。これも神仏(かみほとけ)のお導き、やれやれ、おかげさまで救われた助かった。」
と、ありがたがって、くうなりこみ、がぶがぶ、がぶがぶ、それこそ胃袋がはち切れるほど、飲ませたということじやがの。
その話が、ぱっと郡上じゅうに広がったもんじやで、
「おりも、おりも」
と、みんな連(つ)んだつて、やくやくこの冷たいきれいな水を飲みに、ここまで上つてござつて、干せ死ぬところを助けてもらわせたということじやが。そんなわけで、この辺を郡上谷と呼ぶようになったんじやということを知るとるがのし。



やせ松の墓

あんの一し、鷲見の羽落(はねと)にやせ松と言うもの墓があるが、これは天保のけかちの時、飛騨に住んどつた松造という者の墓じや。松造はそこら界限に、食いもんがのうなつてまつて、人はばたばた死んでいくし、おりも、こうやつておつては、野たれ死にをすと思つてのし、一つ塚を超えた美濃へ行きやなんとかなるじやろうと思つて、あり金全部ふところへ入れて、鷲見までやつとさのことで辿り着いたんじや。けんどのし、長い間、食いもんらしい食いもんは何一つ食つとらんし、そこへ向けて、高い山越にやつて来たもんじやで、体が弱り切つてしまつて、骨と皮と筋ばっかしになつたげな。もうどんにも動けんと言つて、ここんとこで飢え死んまつたんじやが、松造は死ぬ間際に、
「どんな食いもんでもええ、口に入るもんなら何でもええ、おりや死ぬ程ひもじいんじや。」
と言つて、小判を銜(くわ)えて死んでしまつたということじや。
鷲見の人は飢え死んだ松造のことを可哀想に思つて建てたのがこの墓じや。よう痩せ衰えとつたで、せめて墓ぐらいはと、まるまると、よう太つとる石を転がいて来てたててやつたわけじや。
そのじぶん、どうしてそうも食うもんがのうなつてまつたかと言うとのし、天保3年のことじやが、6月の半ばから8月の初めにかけて、毎日毎日、日照り続きで、田んぼや畑にや湿り気がのうなつてしまつて、作りもんは、何もかも次から次へと枯れ死んでまつたんじやそうじや。
その年のことだけなりや、まんだ堪えられたんじやけど、追い打ちをかけるやに、次の年の天保4年にやのし、大地震がいつて、方々で山崩れが起こりやら地割れがせるやらで、その非道(ひど)いことと言つたら、そりゃ、この世が滅しとるんじやないかと思つうくらい揺れに揺れたんじやそうじや。おまけに悪い時にや悪いことが幾つも重なるも

んで、この年の夏はのし、何日も何日も雨が降り続いて寒かったもんじゃで、折角種を蒔いても苗を据えても、伸びもせにゃ実もいらず、田んぼの稲やなんか、秋になってもう直冬が来るというのに、まんだ青々と立っとたんじゃそうじゃ。昔から「巳年のけち」と言うがのし、この年もやっぱり巳年じゃたんじゃそうじゃ。

明るる5年は、まあまあ作柄じゃったもんで、みんなはほっと一息ついたじゃが、またまた悪いことにゃ、6年・7年・8年と続けて3年の凶作が続いたんじゃそうじゃ。食うもんてたら、山のもんも川のもんも野のもんも、手当たり次第に口にしたくらいじゃで、米やなんか拝みとうったて、どこからも出てこりゃせん。世間じゃ1俵1両以上にもなったと言うことじゃ。今の金にせりゃ十万円以上じゃろうか。それも有りゃいけど、無いもんはいくら値ぶみしても出しようすがないはなあ。

それでのし、栃や檜ぼぼなんか、まんだましの方で、冬にゃ雪を掘って蕨の根や葛の根を探して食ったり、およそ食えるというもんは食い尽くいてまったと言うことじゃがのし。今では、誰りも見向きもせんが、「ところの根はもうて、麦の味がする。」と言って、喜ばれたという話じゃ。そのようなわけで、どこの村でものし、食いもんを貰って歩く乞食がうじゃうじゃとおったそうじゃ。言(い)や、松造もそういう連中じゃったんじゃ。

それでのし、昔の人は、いざ鎌倉と言う時に備えて、どんなもんでも粗末にせなんだんじゃが、特に米は菩薩(仏)さまと言って、仏さまと同等に大切にしたもんじゃ。今でも、寿司屋へ行くと飯のことを舍利というじゃろうが、舍利とはお釈迦様のお骨のことじゃ。じゃによって、秋になると田んぼで、実の入った稲穂を大事に掌に受けて、押しなだいたもんじゃ。

折立長者

時はの一、天正13年と言うで、どうじゃろう、太閤さまのご時世じゃろうか。飛騨の白川郷に帰雲城という城があったそうじゃ。その城の殿さまの名前は内ヶ島氏理(うちがしまうじただ)という人で、猟が飯より好きくらいじゃで、気が荒っぽい人じゃったとみえて、その年の秋も家来のもんを勢子に従えてのし、総勢6人で大白川谷へ猪狩りに出かけさせたげな。1日中、あっちの山こっこの谷と、みんな足を棒のようにして駆けずり回らせたんじゃけどものし、ついぞ何にも獲物がなかったんじゃげな。日は暮れてくるし、しゃーないもんで、その夜さりは大白川の温泉の湧き出とるへんで、木の株やら岩す蔭で夜明かしをさせたじゃそうじゃ。

今日こそはと、夜が明けるか明けん間から一生懸命気張って獲物を探し回らせたんじゃけんどのし、影どころか捕れる気差しもせなんだそうじゃ。そしたら知らんまに別山のてっぺんまで登ってま

ってござったんじゃ。「ああ、昨日もだちかにゃ、今日も骨を折ってみただけじゃったな。」

と、みんな気落ちしてしまっして、しゃーなしに山を下ろうと思っしてござったところへのし、氏理があたりをはばかりやうな声で、

「おい、おい、おみたち、二日も駆けずり回って、何も捕れなんだと言うことは、いかにも口惜しいことじゃの一。そこで相談じゃが、俺りゃ思いついたんじゃけんど、てっぺんに祀ってある金仏さまのこっちゃん、何とかできそうな気がしてならんのじゃがのう。」(この仏さんは、金無垢の聖観音像で、平重盛が寄付したといひ伝えられている。)

獲物が何も捕れなんだで、気が苛立っておるところへ向けて、どいつもこいつも強欲なやつらばっかじゃと見えて、仲間に入って一儲けも二儲けもせようと思っしたわけじゃ。「さすがにお殿さんじゃし、おらんとうのような白痴(たわけ)にゃ、とつてもしゃーな

勘考(かんこう)は浮かんでこんもんな。」

と、殿さまの悪知恵を褒めかしながら盗り上げようと思っして手をかけたんじゃ。小さい3寸程(10cm)の仏さんじゃのに、家来の一人がどんなに力んでみても、二人、三人、挙句の果てにゃ、六人全部かかってみたんじゃけんども、びくとも動かせなんだそうじゃ。そんで、持った槍のけつの方の石突と言うところまでこのようにこぜからかいて



みさっせたんじゃが、やっぱり動こうとさっせなんだんじゃそうじゃ。
「小さいくせに、根が生えたように動かんと言うことは、よくよく値うちが有るものに
違いない。」

と、罰の当たることも識らずに値踏みまでして、頭を捻(ひね)くり回したんじゃけども
のし、どんにもええ思案が浮かんでこんもんじゃで、しゃーなしに諦めて、

「一先ず在所へ下りて、明日は別山谷で猟をせまいか。」

と、尾根伝いに大日を下って折立へ降りてござったんじゃげな。釣瓶落(つるべお)とし
の秋の夕日と言うけんども、猟の獲物がないし、悪企み(わるだくみ)も甘(うま)いこと
いかなんだし、まあ、しゃーなやーなことで、みんなの足取りが重うて、谷へ下りさっ
せるじぶんにゃ、日はとっぷり暮れて真っ暗になってしまとったんじゃそうじゃ。早
う休まんことにゃ、と闇を透かいて山狭(はざま)を見ると、ぼーと灯りがみえたもんじ
ゃで、そいつを頼りに行ってみると、そりゃ、おぞ汚い、これでも人が住んどるかしら
んと思うような一軒家が有ったそうじゃ

「やれやれ、これでひとまず助かった。」

悪いことを企みからかいといて、助かったなんてよう言えると思うんじゃがのし、急に
勢いづいたんか、でっかい声で、

「おらんとうは別山へ猟に行ったんじゃが、見付けるには見付かったが、ようたらなん
だもんじゃで、明日もまた行ってみようと思うんじゃが、なんとか今夜一夜さごやっか
いになれまいかえ」

と、宿を頼んだんじゃ。そしたら薄暗い奥の台所からそこんどこの主(あるじ)が出てき
て、

「灯りものうて見てもらうわけにゃいかんが、俺んとこはちいとばかの貧乏じゃないで
、しゃーな大勢の人を泊めったって、第一食わせるものがなんもないし、布団ってたら
、すくべ布団が一かさね有るきしじゃで寝もならんし・・・。そうじゃそうじゃ、ここ
から南へ1丁ばかり行くと、弥左衛門と行って、この界限きってのおだいな家が有るが
、そこなら喜んで泊めてくれさっせるじゃろうで、俺りに付いてござれ。その代わり宿
賃はちったはずまんならんぜ。」

と、弥左衛門の家へ案内されたと言うこっちゃ。盥(たらい)に水を汲んでもらい、夕飯
も鱈腹(たらふく)食わせてもらってのし、でいで弥左衛門さんと猟の話をしたんじゃ。そ
りゃ獲物がなかったで、大きな顔しては話せんわな。糞白痴(くそだわけ)と言うんか、
獲物が捕れなんだ腹いせに、別山のとっぺんでやらかしたことを一部始終話してしまっ
たんじゃそうじゃ。ありようなことじゃと弥左衛門も相槌を打って聞いとたんじゃが、
そいつをみじんやで洗いもんをしながら聞いとたその婆々さはのし、

「山の見置き(みおき)と娘の見置きはなんとかと言うが、そりゃ惜しいこっちゃ。そん
なことは造作の一せやなしにできることなんじゃがなあ。」

と、みんなに聞こえよがしに独り言を言ったんじゃそうじゃ。それを聞いたみんなは、
年寄りというもんは案外物識りじゃで、あんな言(こと)を言ってござるが、どーせりや
あんびよういくんじゃしらんと思って、婆々さと呼んでのし、

「お婆は何もかも知ってござるやーなしこじゃが、どんにせりや甘い(うまい)こといく
んじゃえ」

と、下手にでて尋ねてみたわけじゃ。そしたら婆々さは調子にの
ってのし、

「お身たちや、しゃーなせやないことを知らんのかよ。仏さまの
心(しん)を抜くこちゃ。心を抜くにゃ、汚れた穢い(きたない)もの
を、仏さんに引っかぶせるこっちゃ。そうやなあ、そいつは明日
の朝おまんたあが出掛けるまでにゃ、何とか間に合わせるでのし
」

と言って、寝床につぼまっせたんじゃそうじゃ。

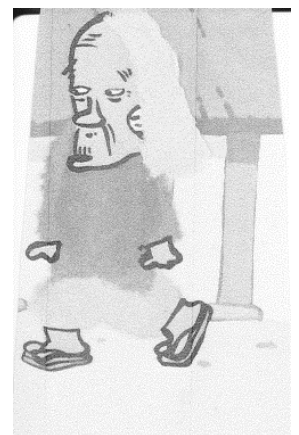
翌朝、みんなは早めに起き、山行きのやわいをしてしまつて、

「さあ、出掛けよまいか。」

と言うことになったわけじゃが、婆々さは俺りゃ何も知らんてや
ーな顔をしてござるもんじゃで、みんながもじもじしとると、

「そうじゃったもなあ」

と言って、みじんやへ行き、夜(よ)んべ炒(い)りやった豆炒りを持ってきてお仏供米
袋(ぶくまいぶくろ)に入れて手渡し、後ろ向きになりやてもじもじしようござると思つた



らのし、手前にしてござった腰巻きの紐(ひも)を解いて、
「こりゃ、こりゃ、こいつのこっちゃ。」
と言って、糞の付いた小便臭い溜(たまり)で煮しめたようなやつを取って丸めてぶつて
いこいといて、何か当てでもしとるような目付きで、
「お前さんたあ、分け前の方はあんじょうなかるうな。」
と言って、喋くりながら指を丸めて円い形を作り、念を押させたと言うこっちゃがのし
。みんなは婆々さから貰った腰巻きを、一番汚いてんごにぶち込んで、
「今度は、やり損なおうと思ったって、やり損ないっこないぞ。」
と、獵のことやなんかでんでそっちのけ、別山のとっぺん目掛けてそりゃ駆けずり上る
や一に登ったんじゃそうじゃ。
「知らんうちに着いたな一よ。」
ど欲がからんだるもんで速いこと速いこと。婆々さに教わった通りに、腰巻きを摘まん
で観音さんに引っかけせたら、あれ程大の男がどや一なことしても、おいそれと動こう
とさせなんだ仏さまがのし、そりゃねっからせやなしに、今度、仏さまの方から転ば
っせたげな。みんな白痴(たわけ)喜びをして喜び合い、また、心が入り込むとだちかん
と言うわけで、その腰巻きに巻き込んでおし、一先ず白川郷へ帰ってござったげな。
そのまんまの姿で売りにでも出いたら、別山から盗って来た言うことがあからさまに
なつてやばいことになるので、どうやったらええか、こそこそひそひそと内緒に相談さ
っせしたんじゃ。談じ合った挙げ句、そのじぶん鉾山といや畑佐か水沢上(みぞれ)かと飛
騨国まで名が響いとった、そこからそんなに遠うない水沢上鉾山へ持っていて、炉で溶
かいてまって金の延べ板にしてしまったらどうじゃろうかと言うことに相談が決まった
んじゃそうじゃ。それで在所の衆にやばれんように、また獵でも行くや一な格好でのし
、水沢上を指して出かけていきやたんじゃ。
まる一日がかりで着き、宿をとって、その悪企み(わるだくみ)の算段を一夜さ中かか
ってしておったんじゃ。まずどこへどや一にして持ってつて、どうせりゃええんか見当
も付かんし、余り声を荒立てて喋りまくるわけにもいかんし、何とかええ知恵が湧いて
こんもんかと、弱り切っておったんじゃげな。やつの間そうしとつたら、氏理(うじた
だ)が、
「そうじゃが、お身(み)たち婆々さと言うもんは、何処(どこ)の婆々さも同じや一に
かす欲が深いし、ここどこにも婆々さが居りやるしこじゃが、ひよっとしたらとてつ
もないええ知恵を貸してもらえるかも知れんで、ちょっと声を掛けてみることにせまい
か。」
と、沈みきつとるみんなに持ちかけたわけじゃ。
「うん、そいつはここじゃ一番ええかんこうじゃ。」
「殿さまは矢張(やっぱ)し知恵者じゃな一」
と言い合いながら、宿の婆々さと呼んで、あれやこれやと鉾山の様子を聞かっせて相談
にのつてもらおうとしたんじゃ。そしたら、そこのお婆は、夜ほど信心深い後生願(い
ごしょうねがい)のええお婆じゃったとみえた、
「俺りはもうこの娑婆(しゃば)で世話になるのも、そう長いことはない。しゃ一な罰の
当たるような罪の種(たね)をまいていくと、後生が浮かばれる筈(はず)もないし、仏罰
観面(ぶつばつてきめん)と言うこっちゃが、やれ、おすがやなんまんたぶつ、なんまんた
ぶつ。」
と、てんで取り合わず部屋へ転げるように出て行った言うこっちゃ。こうなりや直(じ
か)にぶつかって見るより仕方がないと、次の日に鉾山へ行って、
「お身たちの望むだけ銭を呉れるで、こいつを溶かして貰えまいか。」
と、鉾山の者共(もんども)を騙くらかいて、金仏を腰巻きにひっくるんだまんま炉にぶ
ち込んで溶かし始めたんじゃそうじゃ。腰巻きは直(す)んぐ灰になってしまったけん
ども、仏さまの方はのし、一日経っても、照(て)か照(て)か、二日・三日過ぎても、
一向に溶けさっせるや一な気配も伺えなんだそうじゃ。
「堅いにも程が有るが、こんな固い金仏さんは見たことも聞いたこともない。」
と言うわけで、引き続いて四日・五日・六日と夜の間も寝ずに、タタラをてんでばんこ
に踏みからかいたんじゃが、仏さまは余計に光を増ささせるように見えるし、
「どう言うことになつとるんじゃろうか。」
と、みんなあが不審がっておるうちに、七日目の夜さんたを迎えたんじゃそうじゃ。そ

したらその真夜中の12時頃、そりゃ天地が一度にはちけ飛び散るかしらんと思われるよ
一な、とてつもない音がしたと思ったら、天は俄(にわか)にかき曇って、滝を流すよ
うに雨が降り出し、雷(かなり)はひっきりなしに鳴って落ち始め、本当にこの世が滅
(めつ)しかしらんと思う程の大地震がゆすって、白山が大爆発したんじゃそうじゃ。
そのせいで帰り雲・折立・水沢上の三つの在所は山崩れで埋まってしまいうやら、大水に
洗われるやらで、そりゃ惨々(さんざん)な目に合ったんじゃそうじゃがのし。

その時、折立じゃ山崩れで界限中(かいわいちゅう)が全部土に埋まってまって、住んど
るもんも何もかも土砂の下敷きになったと言うことじゃがのし。どうしたことか弥左
さんどこに飼った馬のあおが泥水に押し流されて、淵の真ん中でぐるぐる渦に巻かれて
、もがいとったと言うことじゃがのし。それからそこんどこを馬の巻きあって、今でも
そう呼ばつとるに聞いて見ささせるがええ。そして彼(か)の者共(もんども)に呉れた炒
り豆の祟(たた)りじゃというこっちゃが、それからやつとの間、折立じゃ豆がろくす
ぽ取れなんだんじゃえな。

仏罰観面と言うけれど、非道い目に合ったのは、やっぱし帰り雲と折立と水沢上の三
カ所だけだったんじゃぞな。ついでのこっちゃで話いとくが、それあの水沢上の信心深
いお婆は、その時地面から吹き上げたいかいな石にどつかと乗って、ちっとも危のうな
い山ん中へあんびよう運ばれささせて、なんちゅうってこともなしにしゃーとしてお念
仏を称えてござったと言うことじゃで、ええ種はやっぱし蒔かんらんもんじゃって言
うこっちゃがのし。水沢上へ言ってみさっせい、山の中腹(なかほど)に婆々岩という大き
な石が有るに。

大屋洩

永禄年代或る夏のことで有った。鷲退治の手柄によって、破格の恩賞にあずかった大
屋の家門は、日頃鷲見どんに対する忠勤も抜きん出て信望厚く、平和を取り戻した鷲見
の里で満ち足りた日々を送っていた。

その夏は近年稀に見る日照り続きで、谷川の水は涸れ衰え、鷲見の郷では本流とて川
底現れ、水も細まって糸引く如き状態となった。為に鮎の遡上に大きな影を落とし、姿
を全く見ることができなかつた。

7月も半(なかば)、例年の事なれば、鮎は既に食膳を賑わしているところ、本夏は求
める術もなく、漁(すなど)り事とする者も唯天を仰いで嘆息するばかりであった。鷲見
かぶらのひね漬(ひねづけ)を肴(さかな)にしながら漁師作五郎を相手に、どぶろくを酌み交わし
ていた大屋九兵衛(おおやくへい)は、

「きゃーに、毎日日照りが続いとっちゃ、川の水が干せ上(あが)ってまわんかよ。例年
(いっつも)なら作さの手数で、鮎の御馳走にあずかれるんじゃにのう

「俺らも早う降ってこぼさらんかしらと思って、昨日(きんにょう)も石仏へお頼み申し
て来たんじゃ。けんどもこりも当てにやならんし、いっくら鮎は遡(のぼ)るたって干
上がった川じゃのうー」

「鮎は食いたけんど、打つ手なしってこっちゃの一。でもどんにも一匹ぐらいは腹へ仕
舞い込まんことにや夏越できんが。よーし、明日あたり鮎食いに八幡へでも出掛けるこ
とにせるか。どうじゃ作さお身も俺りの連れになって行ってみんかよ、懐の心配はせん
でもええに。」

「俺りも鮎を食わんことにや、腹の虫が合点せんで、そりゃええ案配じゃ、連(つ)ん
だわしてもらおうとせるか。」

「明け七つ頃じゃぞい。その心算(こころつもり)で今夜やわっとけよのう。」

己に飲み交わしたどぶろく2升5合、兩名とも、したたか酒の豪の者で、約定を交わし
た作五郎は足の乱れも見せず、九兵衛の家を辞して、小早めに床に入った。

翌朝、東天僅かに白みかける頃、兩名は身支度を整え、てんごを背に十里彼方の八幡
へ向けて、足取りも軽く出立した。道中さしたることもなく山坂を下るうち、幾つもの
枝川を集めた長良川の水は流は怖ろしいもので、洩となり瀬となって二人を喜ばせた。ま
た到る所、友釣り、いかり引き、網魚(かっぱ)など河童(かわづむら)の戯れ(たわむれ)も散見できた

。「早う食いたいのし。」

。「うん、早う鮎の顔(つら)が拝みたいもんじゃ。」

他愛もない言葉を交わしながら、足早に八幡を指したので、昼9つ前五町辺りに差しかけた。岸辺の道程遠からざる渚に一艘の舟が浮かび、3人の漁夫の引く網に鮎の踊っているのが見えた。

「舟に乗りさって漁をしてけつかるし、糞業(くそご)がわいてくるのう。」

「うん、けなるいけんども鷺見の郷(さと)じゃ真似のできんこっちゃなあ、見ん方が菓(か)じゃのう。」

立ち止まり再び立ち去ろうとした九兵衛を見た船上類(ほお)かぶりの漁夫が、

「おーい、その方、鷺見郷の大屋ではないか、何をそのように急ぎおる。」

思わぬ所から声掛けられて吃驚(びっくり)ついた九兵衛は、何れの人と船上を凝視(ぎょうし)すれば、これは如何に、紛(まぎ)れもなく八幡城主遠藤但馬守慶隆ではないか、路傍に膝まずいて、

「へ、へー左様で、実は所帯の道具を買い求めんと、八幡まで罷り越したる次第で。」

身繕(みづくろ)いしながら言葉も改めて、咄嗟(とっさ)に思いついた出幡(しゅつばん)の理由(わけ)を申し述べた。そこは主従(しゅじゅ)、声掛けられた嬉しさよりも氣痛(きづ)なさの方が余計募って来て、もじもじしていると、

「馬鹿に慌ておるようじゃの、慌てる乞食はもらいが少ないと申すぞ。後程鮎で一盃やるんじゃが、お主も鮎を肴(さかな)になかまにならんかよ。」

「つれもおりますことで。」

「かまわぬ、連れは多い方が尚よい。遠慮は損慮(そんりょ)じゃ、もう直(じき)あがる。兎に角、見物方々そこで待っとれ、よいか。」

「それでは、お言葉に甘えて。」

と、木陰に身を屈め、漁を見ながら待つことにした。……

盆、正月とてありつけん甘露の味、生きながら料理する鮎のうまさ、舌鼓打ちながら小半時も川岸の宴に侍った。

「酒は連れそうばいと申すが、九兵衛は本当によい所へ来てくれた。予も満足じゃ。時に、其方(そち)は日頃忠勤拔きん出とると鷺見が申しておったが、其方が居る限り、鷺見郷も万々才(ばんばんざい)じゃのう。」

酒の酔いも手伝ってか、身を隠しての漁などそっちのけで勢いづき始め、饒舌が多くなってきた。

「ところで所望するものが有れば何なりと取らせるに、遠慮なく申してみよ。」

思わぬ所で所期の目的以上のものを達することができ感激している所へ向けて、再度の恩恵、如何したらよいかと躊躇(ちゅうちよ)していると、

「早う、早う申さぬか、予の気が変わらぬうちじゃぞ。」

「へい、御馳走にあずかった上に、重ね重ねありがたき仰せ、誠に身にしみて……それでは、ええとこの渚を頂戴いたしたく存じます。」

殿の不興を買うのではないかと、九兵衛は頭(ず)を低うして乞うた。

「なんでもない所望じゃのう。もっと他に金品の類(たぐい)でも申し出すかと思つたのに、まあよいよい、其方の言うことよ。よし決まった。今この渚を其方に与えるぞ。爾今(じこん)、何人たりとも、大屋の許しなくこの渚を侵してはならぬぞ。さあ、固めの盃(さか)じゃ受けい。」

なみなみと注ぎ込まれた大杯の酒を、一気に飲み干した大屋九兵衛。作五郎はどうなることやらと、先刻より船べりで小さくなって、一人ちびりちびりやっていた。

「おう、見事じゃ見事じゃ。これからはのう、其方の苗字を取って大屋渚(おおやふち)とせい。そして、このことについては、鷺見どんにも其方からよう申し伝えておくがよいぞ。」

出幡の目的以上のものが、道中の川岸で叶(かな)えられた挙句(あげく)、思いも寄らぬ渚まで拝領し、狐に憑(つ)かれたような気分で殿の許(もと)を辞し、欲得すべてを失った態(てい)で、ぶらりぶらりと八幡入りをし、行き付けの宿越前屋で旅装を解いた。ごろっと横になり、今日の出来事を一部始終を振り返り振り返り語り合っているうちに、旅の疲れと気疲れから、二人は共に転寝(うたたね)をしてしまった。一時(いっとき)、やがて陽も沈み、小野八幡さま辺(あた)りか郡上踊りに囃(はやし)が流れてくる。酒腹(さけばら)の減らぬまま、宿の食膳もそこそこに外へ出た。

「おい踊りのようなもんは俺らんとこでもやっとなるで珍しゅうもないし。おお、そうじゃ。」

と、大屋渚への道に歩を運び出した。そして改めて岸辺に立ち、その広さを測った。

すると夜陰に乗じて夜網漁（よあみりょう）をしている不届き者がいるではないか。
「こりゃ！その舟の者、誰の許しを受けて舟を乗り入れ夜網をするぞ。この渚は、本日この大屋が殿より拝領したものなるぞ、早々に退散されい。」
声は川面に響いたが、舟の者は聞いてか聞かぬか、一向に引き下がる様子も見せない。九兵衛大いに腹を立て、こうなればと、作五郎と一緒に、舟あるらしき暗がり目掛けて、雨、霰（あられ）の如く石を打った。暗夜の鉄砲も数打ちや当たるのか、2、3命中したらしく、舟は何時しか対岸に消え、後は小波のざわめきだけが残った。急の物持ちになったせいで愠気（りんき）をもたげたか、寝やれぬまま一夜を明した。
翌朝、昨日の御礼言上にと城へ罷（まか）り越（こ）し殿にお目通りした。型通りの挨拶が交わし合わされた後、九兵衛は念を押すために昨日のことに言及した。
「昨日は身に余る頂戴物、誠にありがとうございます。余りの嬉しさに、昨夜も見改めんものと赴（おもむ）きましたところ、不埒（ふらち）にも夜網打ちおる者がおりましたので、殿より拝領した鷺見郷の大屋の所有（もの）であることを申し立てました所、一向に退散せる気配も見せませんでしたので、思い切り石を打って舟を放逐させました次第で・・・」
「よく存じておるぞ、実はのう、その舟の者予（よ）と従者（つれ）じゃったんじゃ。石打つ手が余りにも激しく、退散せねば降り止む気配も見えぬので、止むなく対（むこ）う岸へ逃げたのじゃ。それにしても怖ろしい勢、暗夜とは言え、其方（そち）らの手は確かじゃのう」
「へ、へーっ、殿とは存ぜず彼様（かよう）なことを、御無礼の程、誠に申し訳ございません。非道（ひど）く石打ちましたれば、お体にお怪我でも。」
「うむ、その心配は無用、予は一枚きりあった板片（いたきれ）を盾にしておったで当たらなかったが従者に当たって頭にこぶを作っておったぞ。武士に二言はないと申すが、其方（そち）に与えたものを、予が無断で漁をしたのだから、どんな仕打ちを受けても致し方あるまい。だから声も出せなんだのじゃ。許してもらうのは予の方じゃよ。予はのう、夜網漁が何より好きで、日が暮れかかるとじっとしておれんのじゃ。これから、其方の渚、手頃じゃによって、時々網打ちさせてくれんかのう。その都度何かを取らせるで如何（どう）じゃ。」
「は、はい、願ってもない好都合、拝領したにはしたんけんど、遠方のこととて、何れ殿に管理をお願いせねばとの所存もあって・・・」
「心得たぞ、間違いのう鮎を取らせるで。して其方の年はいくつじゃ。」
「へい、五十の坂を三つも越した耄（おいぼ）れにございまする。」
「そうか、いつまでも達者で暮らせよ。」
それから毎夏のこと、鷺見の郷の湯水、豪雨に関わりなく、決まって鮎五十三匹、但馬守より九兵衛に送り届けられたと言う。

池の平

むかし、むかし、猪の洞の奥の池の平に、そりゃどでかい大蛇が住んどるじゃないかという大きな池があったそうじゃ。
そのじぶん中洞に吉左衛門さと言う人が住んでござって、この池を干（ほ）いてしまったらいかいな田んぼや畑ができるんじゃないか知らんと思わせたそうじゃ。強欲が深くて、一人っきりでやって、あれやこれやと算段を巡らせた挙句、池をとり囲んどるぼたの一番低い所を掘り割って池の水を抜き落といてまうことを考えついたんじゃぞな。
それはまあ、それでええにしてもよな、池の中に住んどった主の大蛇にや、こりゃ非道い迷惑な話じゃぞな。毎日足繁く通って来ばさる吉左衛門さの企（くわだて）を察した大蛇はよな、
「どえらいことになったもんじゃ、早う退（ひ）かんことにやおぞくたい目に合うぞ。」
と言うわけでよな一、真暗闇（まっくらやみ）の晩、その池を抜け出して、なんでも巢郷に結構な池があると聞いたもんじゃないで、そっちの方へ移ってまったんじゃそうじゃ。なんでも池を出て行く時に、
「万劫末代（まんごうまつだい）まで祟（たた）ってやるでな」

と言ひ残したということじゃし、或る日のよな、その大蛇が巢郷の城の石垣を七巻き半もして、吉左衛門さの方をじっと睨んでおったということじゃ。

それから、池の平の方は池の水を落いてまって田んぼや畑を造ったんじゃけんど、種を蒔いても苗を据(す)えても、ねっからできなんだそうじゃし、そうせりや山にせりゃええっていうわけで、松や杉の苗木を植えさっせてもよなあ、植えるきっぱから枯れてまって、どうにもものにならなんだということじゃぞな。

瞽女洞

「瞽女(ごぜ) どもが来ばさったか、この忙しい時にかなわんな」と与右衛門は呟(つぶや)いた。節句が過ぎたとは言え本格的な農作業の仕事にかかるには、まだ日間(ひあい)があった。先刻まで人影の映らなかった間道を、小刻みに杖を動かしながら列をなして、自家へ向かって来る瞽女達の人影を見付けた。門口に立ったその頭領らしき者、慇懃(いんぎん)に

「案内は先刻届いておると思いますが、また役介(やっかい)な者共が大勢押し掛けてきました、宜しゅうお頼みもうしますぞな。」

と、平身低頭になって挨拶をした。与右衛門は不快な念(おもい)を顔(つら)に浮かべながら、

「家に上がって休んでもらうことはええが、今日は家内中出抜けとって誰りも居らんもんじゃで、今の所構っとれんのでのし・・・。」

と、何を思いついたか瞽女達を放たらかいといて、そそくさと表へ出て行ってしまった。先代より常宿、勝手をよく知っているの、みんな、でいに入り込み旅装を解いた。

「与右衛門さの先ほどの塩梅(あんばい)からすると、この度はあんまりええあしらいをしてもらえそうもないな。」

「うん、なんじゃ知らんが、役介者がまたぞろぞろ来たってような声色じゃったなあ。」

などと、自ずと伝わり来る靈感から、みんな勝手気ままにこの家の主の不情をなじり合った。誰れの献立か一汁と香の物の心温まらない夕食も終わり、そして一宿一飯の恩義に報いる、三昧(さみ)の芸や肩揉み等が始まった。だが心なしか引く手揉む手と、聞く手病む手に、隙間風が吹き荒(すさ)んでいた。やがて床に伏し夜を明した。

翌朝、次の目的地西洞を指すべく、早々に身づくろいをして座敷に居並び、頭領が礼を述べ了(おわ)った。

「おまんた、西洞へ行くんじゃって、そんなら近道があるんでよなあ、その道を行きなれりゃ、そりゃ近いはずと早う着けるぞな。」

と、与右衛門は瞽女や座頭と和めなかつた腹いせに、凡(およ)そ方角違いの偽りの道を教えてやった。出しなに注がれた情心(なさけごころ)とやらが仇(あだ)とも知らず、瞽女達は平身低頭、謝意を表して門口を立ち去った。

案内された通りの山路を登り始めた。進む程に起伏激しい山道となり、一方は谷に面した歩危路(ほきじ)、木馬道(きんまみち)の悪路であった。近道ならば然(さ)もあらんと振る杖も繁く、声掛けながら進んで行くうちに、猪洞の奥深く迷い込み道を失ってしまった。そこで始めて夜来(やらい)の宿の主(あるじ)与右衛門の穿(わな)にはまったことを知り、引き返すことにした。やっとの思いで本筋に戻ることでできた瞽女達は、「本当に、おらんとおんなのような片輪者(かたわもん)にまで、非道いことをさっせる人じゃなあ。よう覚えておかせるがええ、ただじゃ置かんぜ、この怨みはいつか屹度(きつと)晴らしてくれるに。」

と西の方を向いて、銘々見えない眼に涙を浮かべて、口々にいつまでも与右衛門の不実をなじり合った。

(後年与右衛門の家には、生まれてくる子に片輪の絶え間がなかったと言う。)



大蛇の恩返し

「馬之助にゃ嫁の来てが無うて、貰わずやもめでおるんじゃぞ。」
と、世間では寄るとたかると、そんな陰口をしたんじゃそうじゃ。それもその筈、第一名前が悪い。そして顔が長い上にぶさいくな男じゃったもんで、年頃になって涎(よだれ)が垂れる程、嫁が欲しかったんじゃけんど、どの娘も相手になってくれんし、最早嫁を貰うことは、だちかまいと大略諦めかけとったそうじゃ。

でもものし、馬之助は健気(けなげ)にも一人きりのお母(つか)を大事にして、毎日毎日、山へ行ってや一炭焼きの仕事に精を出いとったそうじゃ。あしたりは農休みじゃによつて、たまにゃお母にも魚を食わせてやりたいと思つてのし、釣竿を担(かつ)いで、魚籠(びく)を腰にこくり付けて節谷(せつだに)へ魚釣りに出掛けたげな。真心が天に通じたんじゃろか、釣れるって釣れるって、ちょっと釣り上(のぼ)ただけじゃに、魚籠にてんこ盛りになってまったそうじゃ。こりや当にせん早う家へ帰れるぞと思つて、帰りよつたら、でっち子供が3人、ちゅうじかけに入りようる蛇(へんび)を見付け尻尾(しっぽ)をひつ掴(つか)んで引張りようるもんで、

「おい、お身達、可哀想じゃないかよ。しゃーな、やくたいもないことをせずに、早う逃がいてやれよ。」

「おいたべーよ。おらんたこうやって遊ぶのが面白いんじゃわい。」

と、こじらにくいことを抜かしといて、余計力を入れて引張り出そうととったげな。

「よーし、離いてやりゃ、このあまご全部、お身たちに呉れてやるわい。」

と言つて、魚籠を取り外したそうじゃ。

「本当にか。」

「大の男じゃぞ決つとるがの、嘘なんかいうもんか。」

「わーい、へんべよりゃあまごの方がずっとましじゃ。」

馬之助は魚籠を逆さまにして、あまご全部、河原へぶちやけて、でんちこたあに呉れてやったそうじゃ。そして空っぽになった魚籠を、また腰にこくり付けて帰って行ったんじゃ。けんどもものし、あんなにたんとあまごを呉れてやったことを、口惜しがるところか、蛇を助けてやったことで、顔が清々しとったげな。

家に帰つてお母に、釣りに行ったけんど、一匹も持つてこなんだことを許してもらおうと思つて、今日あったことを有り様に話して聞かせてやったそうじゃ。そしたらお母は、

「そうか蛇を助けてやってくれたか、そりゃ、ええことしてくれた。おりは味噌をつついて食うのが一番好きなんじゃで、魚やなんかちつとも食いとないで、しゃーなことて気を病むなよい。」

と言つた、息子のやったことを、心(しん)から喜んどの風に見えたそうじゃ。

それから、2、3日経つた。日の暮れがけに、一人の綺麗な娘が戸口に立って、

「私は、西洞の在所の者じゃが、どうか馬之助さまの嫁さに、させて貰えまいじゃろうか」

と、お母に頼みこませたげな。前々から、お嫁は貰つてやりたかったけんど、来てが無かつたし、始中(しよっちゅう)気を病んどつた所へ、願つてもないええ話が飛び込んできたもんじゃで、馬之助はまんだ山から帰つて来とらなんだけれども一も無(の)う二も無う承知して、家の中へ上げこませたそうじゃ。炭焼きから帰つてきた馬之助は、その話を聞いて、娘を一目見るなり、有頂天になって喜び、嫁さにしたげな。

嫁さは次の日から、朝は早う起きて働くし、夜は遅うまで夜なべに精を出すし、飯はちつとも食わんし、

「ええ嫁じゃ、ええ嫁が来てくれたもんじゃ。」

と、みんな一にふけらがさつせたそうじゃ。在所の若い者は、

「馬之助のような者に、ようあんな別嬪(べっぴん)が来たもんじゃなあ。」

と、口惜しがると、けなるがるやらで、地団駄(ちだんだ)を踏んだげな。馬之助は嫁が若うとつて、別嬪じゃし、おこへ持つてきて、よう働くもんじゃで、のぼせきつてしまつて、嫁の心配を他所(よそ)に、なまくらを起こすようになったんじゃそうじゃ。



そうこうしよるうちに、9月の或日、嫁が在所の祭に出掛けると言うもんじゃで、お母は、御馳走を作って持たせてやったげな。日も暮れ祭も終わったで、もう帰ってくるじゃろうと、首を長うして待とつても、帰って来んもんじゃで、馬之助は青うなまって、あっちゃこっちゃ訪ねたり、探し回ったんじゃ。そうしよったら、村間ヶ池の方で見かけたもんが有ると言うことを聞いたもんじゃで、そしやと言うわけで飛んで見たげな。そしたら、今朝方嫁が家を出る時に持ってった重鉢（じゅうばち）が、池の真ん中に空っぽになって浮いとったそうじゃ。ひっちゃくをこいて落ち込んだ様子もないし、さりとして重鉢は家の物に間違いないし、あれこれと考えようったら、どうも唯の人間で無かったような気がし出し、馬之助は恐（おそ）ごうなつて小洞へ飛んで帰ったと言うことじゃ。

赤牛滝

鷲ヶ岳から切立へ流れ落ちとる恵理美川のことなんじゃがのし、まずこの川は、川と言うより谷と言った方が嵌（あては）まるような流れじゃ。川にや昔は木が覆いかぶさつとつて、昼間でも小暗い所じゃたがのし。その流れに一所（ひとどこ）、水が淀んで壺になった所があるが、赤牛滝（あかうしたき）と言うんじゃ。滝と言や聞こえよけれど、名前だけでのし、糸を引いたような水がすーと垂れ落ちとるだけじゃ。でも滝壺は長い年月の間に掘り抉（えぐ）られてのし、青うて暗うて、見るからにぞんぞ毛の立つ様な所じゃ。

さてその昔、恵理美の平左衛門さと言う人がのし、この滝壺へ魚釣りに出掛けたそうじゃ。滝壺の上にな、大きな松が唐傘をさいたように立つとるもんじゃで、いつものように気を配りながら竿を振って糸を投げ込もうと、松の木一株の所を見たんじゃ。そしたら、それはいかいな赤牛が寝そべとるんじゃないか。こりや可笑しなこっちゃ不思議なこっちゃと思つてのし、

「ホッホッ・・・」

と、声を掛けたんじゃ。そしたら、むくむくと起き上がり、滝壺めがけて、ざぶんと音を立てて飛び込んだと思つたら、姿を隠（かく）いてまったそうじゃ。平左衛門は、今度出てくりや、引こくつてやらすと思つて、しばらく滝壺を睨（にら）んどつたそうじゃが、その赤い牛は遂に影も形も現さなんだそうじゃ。

「こりやどうも可笑しいことじゃ、どうも本物じゃなさそうじゃ、ようし、この正体は、屹度（きつと）突きとめてくれるに。」

と、その夜さは、一匹も釣らずに帰って来たそうじゃがのし。

次の日は、どんより曇つとつて、今にも雨が降り出しそうな、真暗すけな夜じゃったげな。

「よーし、今夜こそは。」

と、手ぐすねひいて、滝を目当てに行つてみると、松の枝にでっかい月が怪しい光を放つて上つとつたそうじゃ。可笑しなことじゃ、確か今夜は月のない晩じゃに、うむ、今夜は月に化けやがって、こんなことでおぼれこむような俺れじゃないぞ、今に見てつけかれ痛い目に合わせてくれるに、と、側にあつた丸太棒をひっ掴んで、力一杯月を目掛けて投げつけたんじゃそうじゃ。と、同時に、

「ギヤッ」

と、悲鳴が聞こえたら、月の光が消え失せ、真暗な闇夜に、

「ドボン」

と、水音が響いたそうじゃ。

平左衛門は気丈夫（きじょうぶ）な人じゃつたもんで、ど正体を見つけるまではと、それから、毎夜さ毎夜さ滝へ行つて見させたけんども、その度胸のええのに、おじけ付いたんか、それからは、もうどんな姿も見せなんだそうじゃ。



泰澄の来村

(地名の起こり)

今から千二百年の余も前のことじゃがのし。

越前の国に泰澄大師と言う、それは徳の高い坊さんがござったんじゃ。白山へ登る道を新たに開くじゃと言って、越前から道中みんなの衆に尊い仏の教えを説いて聞かせながら、桧峠を越え、阿弥陀ヶ滝へ立ち寄って美濃の国へやっでござったんじゃ。そして仏の教えを広める道場にと長滝寺(ちょうりゅうじ)を建てさっせて、あっちこっち熱心に教えを広めさせたもんじゃで、この辺(あたり)の衆は長い間の苦しみや悩みが解けて、末代永劫(まつだいえいごう)に後生(ごしょう)の一大事を救いとってくださる仏を信じ疑わなかったと言うことじゃがのし。

それでじゃ、なんで白山へ登る道を開かせたかと言うと、山には昔から山の神と言って神さまが住んでござってのし、人々のくらし特に農耕と養蚕を守ってくださると信じておったんじゃ。白山は山の格好がよくて、木曾の御嶽や越中の立山などと同じように山全体が神様として、みんなが崇(あが)めとったんじゃ。また、その姿が他の山と比べて女らしいので、女神さまじゃと言って、特に男衆に拝まれたんじゃ。おみや、白山神社と名の付く神社が日本中に千の余もあることを知らまい。そのじぶん白山へ登るには、加賀口、越前口、美濃口の3つの登り口があったんじゃ。美濃口を表口と言ってのし、長滝に参り、石徹白の中居(ちゅうきよ)神社から、まず別山へ登り白山へ辿(たど)る尾根伝いに行く道じゃ。9里8丁雀の三踊りと言って、おおかた、35、6kmもあるじゃろうか。そのような遠い道のりじゃけんど、明治まで男は一生に一度は白山参りをせにゃ一人前じゃないと言ったんじゃ。女じゃって?女やなんか登りとうたって、女であるかぎり登らせてもらえすかよ。それはお経に変成男子(へんじょうなんし)の願があるがな。

そこで、大師は新たに白山への道を開くにあつたつてのし、前谷の西願坊(さいがんぼう)と言う人の案内で、大日岳へ向かわつせたんじゃ。もう直(じき)に鷺見(すみ)郷へ入るんじゃと言う所に、そりゃ見事に大木に藤が巻き付いとって、小暗いような森があつたもんじゃで、まず一服と休むことにさつせたわけじゃ。それからここんろこを藤の森と言うようになったじゃ。年寄り衆なら誰でも知つてござるが、昔、歩いて北濃や白鳥へ通うじぶんにゃのし、高鷺から藤の森で丁度1里(4km)と、言つたもんじゃし、そりゃ一抱(ひとだか)えもあるような藤の蔓(つる)が大蛇のように木に巻き対いとつたもんじゃで、薄気味悪がつてみんな小走りに通り過ぎたもんじゃぜ。

大師は、それから大洞川伝いに、大洞の方へ道をとらつせたんじゃそうじゃ。かねがね大師を敬つていた大洞の助兵衛(すけべい)は、大師がござると言うことで、みんなに布令(ふれ)を回し、有難いお説教を聞かせてもらわつせたことは勿論じゃが、大師の白山登山の願立(がんた)てを聞いて、それなら俺も力にならにゃと、相談にのらつせたわけじゃ。

「よし来た白山への道なら俺にまかしとかけせ。」

と言うわけで、よう熊狩りに別山の方へ行くことがあるもんじゃで、力(りき)んで申出(もうしで)たんじゃげな。そしていざと言う時に大事にしまつた先祖伝来の鉈・鎌・斧を持ち出して、先頭に立って登らせたんじゃそうじゃ。藪があんまり非道で、奥の宮や御弊坂などで休み休み登りようるうちに、やつと大鷺のたかの辺までござったんじゃ。眼下に初めて洞が見えたもんじゃで初(しよ)の洞、もうちよい登つたところの眼下の彼方に洞が伺えたもんじゃから、あの洞、ずーと川向こうの山を越えた狭間に霧が立ちこめている洞が見えたんじゃそうじゃ。それが後に正ヶ洞(初の洞)穴洞(あの洞)切立(切立ち)と呼ぶようになったと言うことじゃがのし。

ついでやで話いとくが、助兵衛が大師を案内する時に持つていた鉈・鎌・斧は、先祖の都落ちした平家の落武者が持つて来たと言えられる。家宝の道具じゃつたと言うことで、今でも大洞の宮の幟(のぼり)に印として使つてあるがのし。

大日岳

泰澄大師の一行は、大日の尾根を一寸刻みのように一足一足登らつせるうちに、おおかてつぺんに近うなつた案配(あんばい)の所までさしかからつせたんじゃがのし、藪がしごうて背の丈を越えとるし、そのうち日が暮れてきて、もうねっちもさちもいかんようになってしまつたんじゃ。やーともしやなしに、そこら辺にあつたでかい木のねきで、石を枕にして一夜を明(あか)さつせることになつたんじゃがの一。

そしたら、その夜さ大師は妙な夢を見させたんじゃ。後光がさいとって、目をあけたまんまじゃまぶしゅうて拝むことのできんような格好のええ仏さまが、大師の枕元に立たせてのし、告(つ)げさせることによ、
「おりは大日如来じゃ、この山で御見(おみ)の来ることを、長い間待ち焦がれとったぞ、尊い仏の教えを広めながら、御身自身も修行を積み重ねると言うことは並大抵のことでない立派な仏の行じゃ。どうかここから白山への登る道を切り開いて山へ登り、白山妙理大権現を手厚うまつってもらいたい。それが成就できるまでしっかりがんばってくれよ。必ず力になるぞ、護ってやるぞ。」
とのし、告げさせたとしたら煙のように消えてしまわせたそうじゃ。その夢ん中に出てござったと言う仏さま大日如来と言うのは、日輪さまのように光り輝いて、限りのう、あますところのう慈(いっく)しみと情(なさけ)をかけてくださると言う仏さまじゃ。

泰澄大師も、大日如来の夢ん中のお告げのような、自分のことはさて置いて、命がけで人助けをさせるような仏さまのようなお人じゃったもんでのし、困らせるようなことや、惑わらせるようなことに出会わさせても、ちゃんと神さま仏さまのお加護があったんじゃ。一夜明けたら昨日(きんにょう)とは打って変わって、どうせんでも山の頂上(てっぺん)への道が開けとって楽々(らくらく)登れたそうじゃ。そんなわけでこの山を、夢ん中に出てござった仏さまの名前をとって、大日岳と付けさせたとんじゃと言うことを聞いとるがのし。

蛭が野

「お祖母(ばあ)、蛭が野はむかしどんぼで、蛭がうじょうじょとおったって言うが、本当かえ、俺りは、ど嘘じゃと思うんじゃけんど。」

「おみんとらあは、くそごくどうじゃで、しゃーなこと、よう本当(ほっと)にせまい、だいいちおらんとうが話いても、まともに聞きずらんおみたちじゃで、たわけらしゅうて話す気も起こらんわい。」

「そしゃ、本当にせるし、まともに聞くで、話いてくりよう。」

「ほっとにせるしかしらんが、まあ、しゃーなことはどうでもええで、そうも聞きたきゃ話いてやるとせるか。」

「むかしむかし、泰澄と言うそりゃ立派な坊さんが、白山へ登るってて、やっこの思いで蛭が野までござったんじゃ。そのじぶんの蛭が野は、そりゃどでっかいけになっとして、人や馬が入るとドボドボと頭のとっぺんまで吸い込まれるように沈んでしまう、見るからにおすがい池じゃったってこっちゃ。」

「そんでやもなあ、まんだ、ズクズク、ブヨブヨしとるところがあるんじゃもな。」

「大師はなあ、まずこの池で手を洗わっせて、ずーと向こうに見える美しい白山を拝ませたとんじゃ。御手洗(みたらい) っちゅう所があるが、大師が手を洗わっせた所じゃっちゅうこっちゃ。」

「ふーん、蛭のうじょうじょおるようなきたない池で、よう洗わっせたな。その時、蛭は喰い付かなんだかよ。」

「大師は仏さまのやーなお人じゃな、蛭でも蛇でも向こうから避けて逃げてくわい。そいうじゃけんど、この辺にも住んどるもんによ。黒いやーに喰い付いたっちゅうこっちゃ。こりゃ蛭も退治してやらにや、みんなあが可哀想じゃ、なんとかしてやらなだちかんと思わっせたわけじゃ。そりゃ池をパンパンにせるよりしかたがないと思いつかせて、水はけの段取りを教えさせたとんじゃこっちゃ。」

「仏さまのやーなお人の言わっせるようなことなもんじゃで、みんなの衆はさっそく教えてもらわっせたとおりに、汗水流いて働いたんじゃ。そしたら池はだんだん干せてきて、だだ広(びろ)い野原に変わってまい蛭もおらんようになってまったと言うこっちゃ。そんで、蛭の巣のやーな池が原っぱになってしまったと言うことで、蛭が野っちゅう名前が付いたんじゃそうじゃ。」

「むかし、蛭が野にや家一軒もなくて、誰りも住んどらなんだっちゅうことじゃが。」

「もうちびっとじゃで、ええ子して聞いてくりよよな。おみたちや利口じゃで、この辺の子た納得いくじゃろが、それ、北の方に大日やその連山(つらなり)が水の流れを防ぐやーにそびえ立っとるじゃろ。けんども水は南の方へ流れずに、北の方へ流れとるじゃろが、おりも可笑しいと思うんじゃ。そんでな、大師が見間違いないたということど、ここんとこを見違(みたが)いとも言うんじゃそうじゃ。」

「むかしもんは、何も知らんもなあ、分水嶺って、そこで降った水は南北二手に分けられちゆうことを。」

「そんな新しいことやなんか、おらにやちっともかかわりないわい。それ、おみんたちがスキーとやらに、よう行くところよ。大師はあのとっぺんに登って、どっかの谷すじに白山へ登れるやーなところがないかって、眺めさっせたわけじゃ。それでこの山を案(あん)じが峰っちゆうようになったんじゃ。いっくら探しても案じて、勾配は急じゃし、とつてもだちかんと思わせたんか、また、もと来た道を逆戻りさっせて、こんだ、石徹白から登るやーにさっせたという話じゃ。」

「おばあ、池を干いてもうやーな、どえらいことでも出来る坊さんじゃったなら、どやーなことでも、せわしなしにできるはずじゃがな。よう登らっせなんだんよ。」

「おみや、坊さんのようなおといお方に、しゃーな、どだわけたやーなことをきききると、ど罰(ばち)があたるぞよ。そりゃ、深い考えがあつてのこっちゃ。どっから登らっせようが、おらんとうじゃ分別がつきかねるんじゃ。」

「ほんでじゃもなあ、泰澄大師がよう登らっせなんだくらいじゃで、蛭が野から白山へ登る道は、今でも開けとらんじゃもなあ。」

「くそごくどうめが、ちつともあんびよう聞きさらさんし。おみたちのよーな性根の腐り切つとるもんは、神も仏も信じまいが、いまに見とれよ、ど罰があたつて泣(な)き顔(つら)をかくに。」



蛭が野から大日岳を望む

天王淵のがろう退治

むかし、むかし、そのむかし、天王の淵に、そりゃおすがいがろうが一匹すんどつたそうじゃ。

そのがろうは、親の言うことを聞かず、魚釣(さかなつ)んに来たり、暑い夏にならん間に、水遊びに来たり、瓜を食って直ぐに水浴びに来る、やんちゃな子供を見付けるとのし、どこに隠れとつたかしらんが、そつと出て来て、足を掴まえ、ぐいぐいと池の淵の真ん中へ引きずり込んだんじゃ。逃げようと思つて、いっくらいかいな石にしがみついてもものし、力が強うて離(はな)させてしまうし、水ん中では、もがきやもがく程、水をねばねばにさせてしまうし、助けて貰わずやに呼ばろうと思つても、口がふさがれてしまつてのし、どんにも逃げる事が出来なんだんじゃそうじゃ。

しゃーにして、言うことを聞かん子供ばっかじゃったけんど、あまり攫(さら)うもんじゃでのし、大次郎っちゆうめっぽう強うて度胸のある人が、

「ようし、俺(お)りが退治してくれる。」

ちゆうて、みんなの見とる前で裸になつてのし、淵へ飛び込んでいっかせたそうじゃ。みんなの衆は、どやーなことになるかしらんと思つて、拝殿に固まって、びくびくしながら見とつたんじゃが、大次郎が余り上がつて来んもんじゃで、淵の中を見ようと思つてのし、そろそろおそがそうに岩すの上まで来たら、大次郎ががろうを抱きかかえて浮いてござつたんじゃ。みんなは、丸太棒(まるたんぼう)や石を持って、飛んでつたらしのし、大次郎は掴まえてきたがろう



を両手に持ち上げて、河原の石に力一杯叩きつけさせたそうじゃ。がろうは一ぺんにのびてしま

天王の淵

ったんじゃが、そいつを今度は、みんなあが寄ってたかって叩っからかいたもんじゃで、本当に見るも哀れな姿で死んでまったそうじゃえな。

この話を、お身達(みたち)や本当にせまいけど、ほんのこの間まで宮ヶ瀬橋からちよっと下った所に、がろう石ってて、がろうが潜んでおったちゅう、大きな石が有ったんじゃ。嘘じゃと思うんなら、年寄りの衆に聞いてみるがええ。みんな知ってござるに。そりゃ、おすががって誰りも寄りつかなんだもんじゃ。

うすぼどちの天狗

むかし、むかし、切立のうすぼどちに、天までとどくんじゃないのかと思うような、とてつもない大きな栃の木があったそうじゃ。この栃の木にいつの間にか天狗が休むようになったんじゃ。枝振りのええ枝に腰をおろして、どこからとも無う来て、休んでは帰って行く、そんな天狗のことをみんな噂しよったそうじゃ。

そのうすおどちの向かい側に、彦助と言うお爺が小屋を建て、とおしの輪を拵(こしら)えることを商売にしながら一人寂しゅう暮らとったんじゃ。その彦助の所へ何時の間にか、栃の木に休みに来ようる天狗が、退屈なもんじゃで、ちょくちょく遊びに立ち寄るようになったんじゃ。体ががっしりしとって、顔が赤く、鼻の高い風采のええ年寄り天狗じゃったそうじゃ。彦助は、

「これが噂に聞く天狗さまと言うんじゃな。」

と思ったけど、毛嫌いもせず、小屋に上げて休ませてやったんじゃそうじゃ。そして、天狗は調子にのって、毎日毎日、通うようになったんじゃ。来る日も来る日も、囲炉裏(いろり)の側で向かい合って、夕方、天狗が自分の巢に帰っていくまで、そりゃ長いこと。

毎日毎日のことで、話も底がつき、面白い話しも聞けんようになったんじゃ。彦助もこんなことばっかししていると、商売の方があがったりになるぞ思い出して、今日はどうでも木を切んに行かんならん。どうか天狗さまが来てくれにゃ、ええがなと思とったんじゃ。そうすると、いつもより小早めにとことこやって来たんじゃ。

「俺りゃ、今日は忙しいで、お身のや一遊び人(あそびど)の相手をしとれんで帰ってくれんか。」

と、口に出いて言いもならず、むっとした様な顔をして、何時ものように、向かい合って座ったんじゃ。

天狗は、

「彦助め、今日は、どうも小機嫌が悪いな、俺りと話しようもないんじゃな。」

と、見抜いておったけど、別にそんな素振りも見せず、二人は黙りこくって座っておったんじゃ。

彦助は、桧を割って、薄(うす)うへいた曲げものの木を火で炙(あぶ)って、とおしの輪を作り始めたんじゃが



「そう言や、天狗は、火を嫌うって言うことじゃが。」

と、心の中でつぶやきながら、くるっと曲げて、元にもどらん様に、紐(ひも)でこくって、火の近くへ据(す)えたんじゃ。何のはずみやったか、「ピーン」と、音がしたと思ったら、こくってあった紐が焼け解けて、ひん曲げた木が反り返って囲炉裏の火と熱い灰を弾いて、天狗の体に、降りっ掛けたんじゃ。

「熱い。」

と、天狗は、火の粉を浴びながら、小屋を飛び出いて、

「来て貰いとうないもんで、うまいこと追い出す手を、企(たくら)んだなあ。」

と、小屋を逃げ出いて行ったそうじゃ。それからは、もう二度と再び天狗は、よう寄りつかなんだと言うこっちゃ。

小屋も栃の木も、今はもう無いけど、小屋跡の辺りは、彦助が天狗を追い出す手を、うまいこと企んだ所じゃと言うので、「たくみ」と、言うようになったと言うこっちゃぞな。

正会の戦

むかし、むかし驚見の殿様が、長門守朝保のじぶんのことじゃがのし。
飛騨白川郷の帰雲城の殿様内ヶ島氏は、そりゃ大勢の武士を引き連れて美濃の
国へ攻め込もうとしたんじゃ。どうしてかと言えと、遠藤盛数と戦をして延び
東常堯と言殿様がとされて、手前は命から娘の婿の助けを借りて郡上の願
負け、城を攻め落とす。そうして何とか構えてござったわけじゃな。氏理は親
てきたと言わいと、時が来るのを待ち構えて張りたいような下心もあつたも
を返さないと、手前も美濃に勢力を張りたいやうな下心もあつたも
ら、飛騨のあちこちから、仰山の武士を狩集め、莊川街道と明方街道の二
分けて、郡上へ攻め入ろうとしたわけなんじゃ。驚見の殿様はのし、この動
ち早く聞いて、こりゃ一刻の猶予もならんと思ひ、早馬を立てて盛数に知
じゃ。盛数はかねてこんなこともあろうと、備えておいた手下も者どもを差
し向けて防がせることにさせたんじゃ。そして、盛数の味方に付かせた驚見
様は飛騨の軍勢を此処から一歩でも踏み込ませたんでは己が名折れとばかり頑
砦を築いて待ち構えてござったわけじゃ。
盛数の強の者は、その昔、平将門の乱で穴洞へ落ちのびて来とった平良忠の
城跡福部野に陣取って、敵に見られんやうに待ち伏せ作戦をとることにしたん
そうじゃ。そうこうして、うちにのし、氏理、常堯の五百の余もあろうかと思
どの軍勢が、西洞から山を下って正会まで攻めよって来たわけじゃ。郡上に入
見の館も近うなつて来たし、まともな道を通っていくとどんな計略にひつかる
しれんもんで、谷を挟んでじつと睨みやんこしとったんじゃ。そういつたら、ど
んな作戦を立てたんか、百人程の勢力に川を渡らせ、炭屋尾へ回らせて、そ
方から攻め立てようとしたんじゃ。この動きをいち早く察した盛数の侍大將は、
ばしこう五、六十人の勢力を、こっそり恵比寿峠に回し、一気に炭屋尾へ駆け上
せてのし、敵の軍勢の後ろ高い山の尾根から攻めまくったんじゃ。真逆屏風を
てたような尾根から来れまいとたかをくくっておったもんで、隙を突かれた
武士どもは一ぺんに崩れてまって、我先にと氏理の本陣に逃げ返ってまった
。このように攻めるに攻められず、引くに引けず、人を構えて唯睨み合いな
明るいうちは谷の向こう側から矢を放ってや、相手の手ごたえを覗うよう
けとったんじゃ。この谷は小さな谷じゃけんども、守りが固うて越すに越さ
と云って越さん。ことにや埒が明かず、切っ掛けが掴めまんま向かい合っ
へのし、明方筋へ向かった軍勢が負けてしまつて総崩れになつたと言
つたんじゃ。「戦いのは一先ず置いて、ともかくみんな引き上げてもら
たい。」と言つて聞かされてのし、氏理は早々と軍勢を取りまとめ、引き返
つせたと云うことじゃ。そのやうなわけで、戦いも収まったもんで、盛数の
ぼちぼち引き上げて行かすと言つたわけじゃがのし。
今、マス園のある辺を正会と言つたが、これは飛騨の軍勢が総返りした野原を
ことで、総返り野と呼ぶのが本當の言い方のような気がするし、炭屋尾もそれ
取手が尾と言つたやうになつたんじゃ。それから穴洞の瓢が野と言つたのは、
伏兵が野と呼ぶのが本當なんじゃげな。そのわけは、
さつき話いたやうに盛数の士どもが待ち伏せして負つ
たと言つた野じゃによつてじゃのう。
氏理・常堯はそれから後も、余ほど郡上に未練があつたんか、何べんの何べんも攻め込もうと企てたが、
その都度盛数や驚見どの軍勢に阻まれて、どんにも
念願を成就することが果たせなんだそうじゃ。
このやうなことの繰り返しがあつて歳月が移り変わるうちに、天正13年11月29日、白山が大爆発を起
したんじゃ。そして、氏理等の立籠つとった帰雲城は山ががごと崩れて、氏理も常堯も500余の士共も、
一たまりも城もろとも埋まらぬまま、永久にこの世から姿を滅してま
つたと言つたことじゃがのし。



狐の嫁入り

昔は、大が野の辺で、狐が提灯をともいて、よう嫁入りをしよったもんじゃ。暗うなあってまって、人通りの絶えてまった山道を、狐共は安気助こいて、ピカ、ピカ、チカ、チカ、灯をともし、行ったり来たり、嫁入りの行列を組みよったもんじゃ。

があらう 平謝り

むかし、むかし、其の大昔よ。どろ渕（下地下）にのし、いこうてきつうて人でござれ牛でござれ、何でも平気で捕って食ってまうがあらうが住んでおったそうじゃ。

春先のこっちゃんが、小洞の与八郎さと言う人の家が、家内総出で踏ませに精出いてござったんじゃ。踏ませってや、今は、ちっともせんようになつたけんども、昔はのし、春先早うから、笹の葉を刈り集めに、蛭が野の辺まで泊りがけで行ったもんじゃ。そいつを、代搔きした田んぼ一枚こっきしも残さんように隅から隅まで撒き散らいといて、其の上、山から草を刈って来て敷き詰め、地団駄を踏むように、一足一足、草を泥の中へ踏み込む仕事じゃったんじゃ。何はともあれ、足の数が一本でも多けりゃ、そんだけ余計に、果がいくわけっじゃで、踏ませっちゅうと家内中総出で踏んだもんじゃがのし、馬は四つ足じゃろ、そんで、人の二倍もできるっちゅうわけで、飼っとる人は、みんな田んぼの中へ引きずり込ませたんじゃ。「講釈は、ちっとも言わんし、糞子供達をこき使うより、余程増しじゃわい。」と、与八郎もせっせと引張りようござるうちに、今日丸一日はかかるじゃろうと、当てこんどった、いかいな田んぼがのし、思ったより早う済んでまったんじゃそうじゃ。

「やれ、やれ、赤、お前のお陰で、あてもせん早う済んで有難かったわい。御苦労じゃったのう。」

と、馬が泥だらけになってまったもんじゃで、たまにや、水浴ベでもさせて、綺麗にしてくれずやと思つてのし、どろ渕へ連れて来て、体を洗ってやったり、水浴ベもさせてやったんじゃ。そして、渕のほんねきに、柳の木があつたもんじゃで、繫いどいてのし、手前は、後で魚を釣らずやに、渕の下で川虫を捕りようござったんじゃ。

そうしようつたら、水ん中で竦んどって、じーと様子を覗つとつたがあらうが、与八郎が川下の方へ行って、姿が見えんや一になつたもんじゃでのし。

「こりゃ、よう肥えとる馬じゃし、今夜の御馳走に、おあつらえむきじゃわい。」

と、繫いであつた綱を解いて、どうしても逃げれんや一に、手前の腰にぐるぐる巻いて、渕の中へ引きずり込もうとしたじゃ。馬は、また水浴ベをさせて貰えろと思つて喜んで付いてったんじゃが、だんだん深うなるにつれて、苦しゅうなってくるもんじゃで、死にもの狂いで暴れだしたんじゃそうじゃ。があらうは、こんどは、

あべこべに、ぐいぐい引っ張られてのし、とうとう川原へ引きずり上げられ、ぶるぶる震えとつたそうじゃ。丁度其処へ、与八郎が虫を取って帰って来たんじゃ。があらうは、今にも取って掛かろうとする和八郎の剣幕に、びっくらこき、地べた頭をこすりつけ命乞いをしたそうじゃ。与八郎は、萎びつきまるとるがあらうを見て可哀想に思つてのし、

「もし、これから先、人や馬を取るような真似をして見よ、唯で置かんに、非道目に合わせてくれるに。」

「まあー、きゃーなことは絶対せんに、どうか御免してくりよ。」

と、がくがく震えながら、平謝りに謝つたもんじゃで、与八郎は、いよいよ可哀想になつてのし、があらうが腰に巻き付けとつた綱をほど



いてやって、逃いでやったそうじゃ。

それからちゅもんは、ずーと今日まで、よう言うことを聞いて、人や馬をせこめたり取ったりせんようになったというこっちゃ。

があろう 肝を取る

「わんだどもに、よう言て聞かせるが、飯を食って直んぐに、水浴べに行くとな、があろうに引きずり込まれ、肝を取って食われるってことを、きんによも昼飯を食ったで、子守させようと思つたら、もうけつかなんだな。誰りと何処へ行くんじゃ知らんが、隠れるよ一うにして、水浴べに失せさる。」

「どうせ、あのほったのはばじゃろ。あの辺にやがろうがおるんじゃぞ、くそだわけめが。」

「むかし、長兵衛さのでちが、飯を掻き込んだと思つたら、親の言うことを聞かず、水浴べか魚捕りか知らんが、行きずらつたんじゃ。」

「夜さんた、薄暗うなつて、みんな仕事から帰つて来たんじゃけん、でちだけが帰つて来んじゃで、『くそだわけめが、何時まで遊び呆けてけつかる。帰つて来たらどじかしてくるに。』と、みんな夕飯を済ませて待つとつたんじゃぞ。」

「いくつら経つても、帰つて来んもんじゃで『こりゃいっくらなんでも可笑しいぞ』とあっちこっち尋ねてみたんじゃけん、みんな知らんて言うし、ひよつとせりゃ家の中で寝とるんじゃないかつて、捜してもおらんし、そんで大騒ぎになつたんじゃ。」

「でちちは、何時でも黙つて川へ行きさるで、ひよつとせりやつて、川へ行つてみさせたんじゃ。ほったのはばにや、昔からがあろうが居るつてこっちゃが、よもやと思つて、川底をカンテラで照らして見ると、どうじゃよ、でちが沈んどうつたじゃぞ。」

「そんなじゃで、大急いで引き上げて、尻の穴を見させつたんじゃぞ。」

「そしたらどうじゃ、昔からがあろうは、人の肝を取つて食うちゅうが、案の定、手を突っ込んで肝を取つたらしゅう、尻の穴が開いてまつたんじゃ。」

「ええか、わしんだどもも、飯を食って直んぐに、川へやなんか行つて見よ、があろうに引き込まれて、肝を引き抜かれた挙句、おつ父もおつ母もおらん、遠い所へ一人つきりで行かなん。」



ホギヤホギヤ淵のがあろう

むかし、むかし、大洞川の三段滝の滝壺に、があろうが住んどつたそうじゃがのし。或る時のこっちゃが、どつかのお爺が、山へ草刈りに行くつてのし、此の滝の頭を渡りようつたんじゃ、そして何の気なしに滝壺をのぞいて見たんじゃ。そしたら、のし、「ホギヤ、ホギヤ。」と泣きながら赤ん坊が浮いとるんじゃないかよ。

「おりよ、こんな所に赤ん坊が……。」

と、早速助けに下りて行つたんじゃそうじゃ。そして、赤ん坊に手を掛けようと思つたら、のし、そりゃ恐ろしゅう力のあるもんが、お爺の手をぐいと引き掴んで、淵の中へ引きずり込んでまつたんじゃそうじゃ。そいつが世間で言う、があろうだつたんじゃ。

家の者、お爺は山へ芝刈りに行かしたまんま、何時までも帰つてござらんが、不審の思つてのし、捜しに出かけたんじゃ。そしたら滝壺に、頭をかち割れて、中の脳味噌が無うなつとるお爺が浮かんどつたんじゃ。「なんでも、あの淵にや、があろうが居ると言うこっちゃが、矢張りそうじゃつたか。」と、それから、誰も

「おすががって、寄り付かなんだそうじゃがのし。」
今での、周りが立ちこんどるもんじゃでのし、こ暗うてこ気持ち悪いようなふち
じゃぞな。そんで誰りも、よう寄りつかんがのし。

母を殺した山鳩

むかし、むかしのことじゃ。山奥に山鳩の母子が暮いとつたそうじゃ。母鳩は、子鳩をひとねるために、せっせと山芋を掘ってはやあ、ええとこだけをほじくって、子鳩たちに食わせてやったんじゃそうじゃ。子鳩は、

「こりやうまい、こりやうまい。」
と、うんまがって食いよるうちに、だんだん大きゅうなつていったんじゃそうじゃ。

「おい、おっ母は、おらんとくに、きゃーなうんまいもんばっかし、食わせてくれささせるが、おっ母は、よっぼどええもんを食ってござるのじゃろうなあ。」

「そんなら、おっ母を殺いて、腹を切り裂いてみるか。」

と言つて、誰のお陰で大きゅうしてもらったかしらんが、其の大恩も忘れて、たいもないことを、やつてのけたんじゃそうじゃ。」

そしたらもう、おっ母の腹の中にや、山芋のえごい所（食えない所）ばっか、詰まっとたんじゃそうじゃ。子鳩達は、当てが外れたことを悔やむ前に、世にも恐ろしい大罪をおかしたことに気が付いて、目の縁を真っ赤にして泣いたそうじゃ。

いくら泣いたつて、もう母親は帰つてくりやせん、そんでなあ

「テテッ ポッポー ハッハ コイシー」（母恋しい）

つて鳴くんじゃつて、おらのおっ母は、餉時の度に思い出いてやー、話してくれさせたもんじゃ。



子守り地蔵

むかしはなあ、本当に狼がおつたんじゃぞ、俺らんとうの習った修身とか言う本で「狼が来た」と、しょつ中、大人に嘘をついて騙くらかいていた子供が、本当に出た時にや、誰にも助けて貰えず、食い殺されてしまたんじゃと、教えてもらった。

あんのう、折立のある所の嫁さが可愛い赤ん坊をイズミに入れて、田んぼの仕事に出かけたんじゃ。暑い夏の事じゃで、縁げの戸も明け放いといて行つたんじゃ。その中に乳が欲しゅうなつたんか、火の着いたように泣き出したんじゃ。

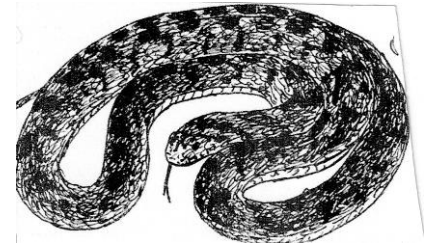
狼め、其の泣き声を何処で聞きつけたんか、音ものう忍び寄つて来て赤ん坊をくわえ、山の中へ逃げ込んで行つたんじゃ。その後ろ姿を、もうそろそろ乳を呉れにやと、田んぼから上がつて来た嫁さが見たわけじゃ。気が転倒せんばかりにイズミへ駆け寄つて見りや、我が子の姿は見当たらんし、みんなして、狼の入り込んだ山ん中を探したんじゃけんどうどーにもこうにもならなんだんじゃ。嫁さは、

「堪忍してくりよ、俺りがわるかった。あんびよう守りをせなんだばかりに、
・・。」と、泣きわめいたそうじゃ。日は経つていったんじゃけんどう、どうにも諦め切れず、そんで、地蔵さんを作つてやったんじゃ。

しっかり赤ん坊を抱きしめて、絶対離さん地蔵さんの姿になあ。

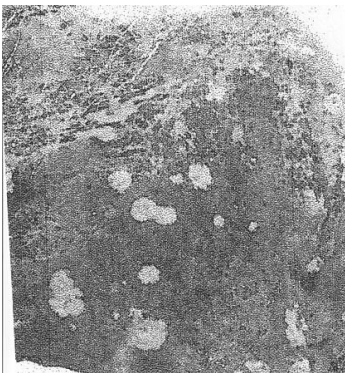
どんぼ淵の水へんび

むかしなあ、どんぼ淵にや、水へんびがおったんじゃぞ。
向鷲見の、どっかの悪でっちめがなあ、親の言うことも聞かずになあ、一人でく
そんぼ釣りに行ったんじゃそうじゃ。
夕方、遅うなっても帰って来ばさらんもんじゃで、
「糞でっちめが、ずり、また魚釣りに行きやがって、
今、何時じゃと思っけつかるんじゃ。」
「ほんでも待てよ。いつもは、きゃーに遅うまでおら
ん筈じゃ。」と捜しに出かけたらなあ、どんぼ淵で、
水へんびに巻き付かれて死んどったじゃ。
「どんぼ淵にや、水へんびが泳いどるし、鍋淵にや、
人取る亀が竦んどるって、あんだけ言っといたやに。」
と、非道う嘆かせたと言うことじゃ。

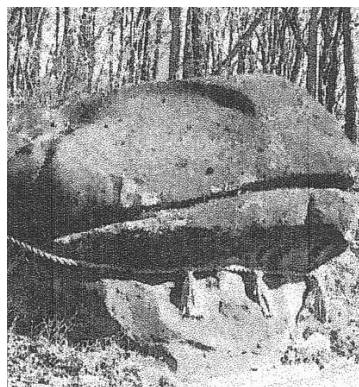


高鷲三っ石

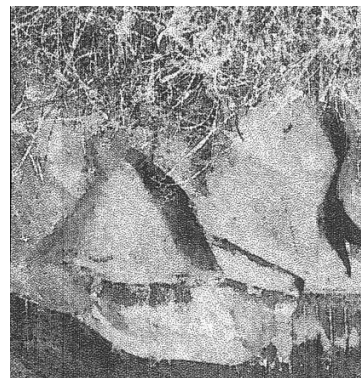
むかしから此の村にやのし、大石、ミノコブ石、ワニ石と呼ばれとる三つの石が
あると言ひ伝えられとるんじゃ。こいつが何処にあるかは、おりや聞いとらんで知
らんけんど、何でものし、此の三っ石を線で結ぶと、まっとうな三角ができるそう
じゃ。そしてのし、此の三っ石が、一ところに寄り集らさせた時が、この世が滅す
る時じゃそうじゃがのし。



西洞の大石



広域農道傍の鱈石



サメンバーズホテル裏のミノコブ石